

6 本丸地区の調査（第 1 4 4 ～ 2 4 6 図、PL38～47・50、PL96～136、PL187～213）

（1）概要（第 144・145 図）

As-B 層より下層は基本的に北が高く、南に行くにしたがって低くなっていく。こうした旧地形から、何時期かにわたり、北方面を削平し南方面に盛土して、最終的に、概ね平らになったのが、現在の本丸の姿である。

本丸地区では堀の造り替えの状況から大きく 3 時期にわたる時期変遷が確認された。（堀からみた時期変遷という意味で、以下、堀〇期と表記）

堀Ⅰ期は、1 号堀・2 号堀の時期である。堀Ⅱ期は、1 号堀・2 号堀の南東側が埋められ、3 号堀が新たに掘られた時期である。堀Ⅲ期は、3 号堀が埋められ、現在の縄張りになり、3 号堀埋土上に北虎口が造られる時期である。

以上は堀の切り合い関係から見た時期変遷である。一方で、盛土層の層位的状況からみた時期変遷もある。（盛土層から見た時期変遷という意味で、以下盛〇期と表記）

盛Ⅰ期は、As-B 層直上面で築城面にあたる。この面から掘り込んだ柱穴などの遺構が確認されている。また、1 号堀北東側に黒色土で形成された層が厚く堆積しており、この層が As-B 上に造成された土塁であると仮定した場合、堀Ⅰ期は盛Ⅰ期と対応する可能性がある。盛Ⅱ期は As-B 層上に若干の盛土がされた面である。SX4、SD4 などの遺構が該当するであろう。盛Ⅲ期は盛土層最上面で、城最終時の面にあたる。ただし、耕作による影響のため、最終時の面が完全に残っているとはいいがたい。また、盛土がない G5・G6・H5・H6 グリットでは、盛Ⅰ～盛Ⅲ期の遺構が重複している。このため、遺物がほとんど出土しない多くの柱穴などの時期認定は困難である。ただし、盛土最上面で検出されている SD2・SD6 の続きの位置で検出されている SD7 や SD7 と軸を同じにする礎石建物・SD8・SD9 などは盛Ⅲ期に位置づけられよう。盛Ⅲ期の遺構は、盛土層最上面という意味では、各虎口の遺構なども該当し、城最終時期に使われていた遺構になる。ただし、盛Ⅰ期と盛Ⅱ期の間、盛Ⅱ期と盛Ⅲ期の間にさらに遺構が確認された面もあるため、盛Ⅲ期内、あるいは、盛Ⅱ期から盛Ⅲ期にかけて更なる細分が可能な場所もある。なお、盛土層からの時期変遷と、堀からみた時期変遷については、第Ⅴ章で整理するが、盛Ⅰ・Ⅱ期は堀Ⅰ期に、盛Ⅲ期は堀Ⅱ・Ⅲ期にそれぞれ対応する。そのため、以下では、特に断らない限り、切り合い関係が明確な堀の変遷を用いることとし、表記についても各時期の前に冠している「堀」は省略する。

（2）検出された遺構

①本丸・御前曲輪間堀、本丸・御前曲輪間土橋（第 146・151 図）

本丸と御前曲輪間の空堀は、浅野文庫絵図では本丸側に土塁が巡っていたことがわかるが、調査前の現状で土塁はなく、幅約 20m、深さ約 2.5m で南側部分の傾斜が緩い空堀となっている。

98・9910T（第 151 図）は堀を縦断する形で設定し、石が集中する箇所は残してサブトレンチを設定し掘り下げた。ロームブロックが多量に含まれつき固めたようにしまりが強い土と 20～40cm ほどの角をとった切石が多量に含まれる層が 12・18・24 層で確認された。この各層下の 16・21・25 層はしまりが弱く、これらの層をはさみ 3 回にわたり切石としまりの強い土が含まれる層の堆積があったことがうかがえた。概ね本丸側から流れ込んでいるので絵図にある土塁が崩壊、あるいは埋め戻した際の土の可能性もある。

堀の底は完全に確認できなかったが現況の堀底から少なくとも 4.2m の深さがあり、薬研堀になるようである。トレンチ幅が 2m のため障壁があるかは確認できていない。土器等の遺物は全く検出されなかった。

調査中に大雨に見舞われ壁面が崩壊したために、図面・写真等は完全には記録できなかった。

本丸・御前曲輪をつなぐ土橋部分では、調査前の現状は、北側の法面最上部に高さ約 50cm の土塁が残っていた。調査を進めると 065T、064T（第 146 図）ともに石組溝が確認された。両者とも、輝石安山岩の自然石を用いた幅 20～30cm、深さ 15cm の溝である。この溝は走行方向、

規模から、北虎口の SD19 と同一溝であろう。両トレンチ共、表土、及び、崩落土を剥ぐと地山のローム層になり、掘り残しの土橋であることが明らかになった。064T では土橋壁面に約 1m のフラットな部分があり、犬走りの段の可能性も考えられる。

②本丸北虎口（第 147 図・148 図）

本丸北端に位置し、土橋で御前曲輪と接続している。虎口東側は、本丸東端を巡る高さ約 1.5 m の土塁が固めている。虎口西側では土塁の存在が認められないが、本丸・御前曲輪間の堀を調査した 98・9910T で、堀の覆土が本丸側から廃棄されていることから、本丸北側にも土塁が存在した可能性が高い。

北虎口は、本丸の約北半分にあった 2 号堀・3 号堀の埋土上に位置する。そのため、廃城後の遺物を含む層を除去した面は、地山ではなく堀埋土になる。そして、この面が北虎口の門跡の面である。

門北側上層には、大量の礫が廃棄されている状況であった（PL96）。そのため、礫によってパックされた状態になり、残りが良好であった。一方、門南側は、廃城後の耕作等のため、面の残りが悪く排水溝の底石などが、かろうじて検出される状況であった。また、門東側には土塁裾に沿って攪乱の溝が走っており、一部、石垣などは壊されていた。このような検出状況であったが、残りが良かった場所も多かったため、ほぼ門の規模が確定できた。

門の礎石は、S1・S2・S4・S5・S6・S7・S10 である。これらの石底面には栗石が入れられていたものとみられ、特に、S1・S2・S4・S7・S10 は、石周囲で栗石が目立った。このような礎石の据え方がすべてでなされていたとの前提に立つと、径 5～10cm 程度の礫が集中している、S?11・S?12・S?13 は礎石が本来あったと想定できよう。これら、S?11・S?12・S?13 にも礎石があったとすると、門の奥行は S1・S2～S?12 間の距離で、3.27m、S7～S?13 間で 3.28m になる。S8・S9 は S7・S10・S13 の列から外れるため、門東側の土塁と門の間に造られた構築物の礎石である可能性が高い。そのため、門の幅は、S1・S2～S7 間の距離で 5.36m の規模になろう。

各礎石間の距離は、芯々で S1～S2 間は 0.36m、S1・S2～S4 間は 1.27m、S4～S5 間は 2.11m、S5～S6 間は 0.65m、S6～S7 間は 1.33m、S7～S8 間は 0.58m、S8～S9 間は 0.45m、S1・S2～S?11 間は 1.67m、S?11～S?12 間は 1.60m、S7～S10 間は 1.51m、S10～S?13 間は 1.77m、S?11～S10 間は 5.42m、S?12～S?13 間は 5.37m である。

排水用と門の雨落ちを兼ねる溝は SD19・SD11・SD12・SD13 である。大量の礫に覆われていた門北側の遺存状況が良い。SD19 は側石の南東端と南西端の 2 石をのぞき、河原石が使われている。南東端の 1 石は宝篋印塔基礎で、南西端の 1 石は五輪塔地輪である。この溝は、064T、065T に検出されている溝の続きになるであろう。SD11 の溝側石は全て石塔で、宝篋印塔の基礎が 3 石、塔身が 1 石で他は五輪塔地輪が使われている。溝底石は牛伏砂岩製の五輪塔地輪が東端付近で 1 石使われている以外は河原石である。SD12 は宝篋印塔塔身が 2 石使われている以外はほぼ五輪塔地輪が用いられている。SD13 は残りが悪く溝底石のみの検出である。河原石のみが使われている。溝西端から、南側にクランクするように 1 石検出されていることから、本丸内に溝が伸びていた可能性が高いが、続きの溝は、南側のトレンチ等では確認されなかった。おそらく、後世の耕作により、完全に取り除かれているものと思われる。

溝自体の傾斜に関しては、SD19 は南側に傾斜する。SD11 は東側が最も低く、中央部は最も高い、西側は SD12 に接続する部分が低い、東側よりは高い。SD12 は南側に行くに従い、低くなるが、SD13 と接続する 1 石は最深部より高い。SD13 は SD12 と接続するあたりが一番低くなっている。全ての溝で最も低い箇所は、SD12 が途切れる辺りである。このことから、水の流れが、本丸側へ行くのか御前曲輪側に行くのかが明確にはできなかった。

S7 と S10、S10 と S?13 間は五輪塔地輪を用いた石列状になっている。礎石間に石を並べて、石列状にする例は郭馬出西虎口でもみられた。門の側壁を支える土台であろうか。門西側にはこの石列が認められなかったが、残りが悪いためであろう。S2 の南側約 20cm には五輪塔地輪

が1石あり、本来あった石列の中で、かろうじて残った1石の可能性があらう。

SV6は高さ0.62mで3段に積まれた石垣である。根石に五輪塔地輪が2石使われている。北西側約1mのトレンチでは、続きは確認されず、土塁にそのまま接続している。一方、南側は後世の攪乱によって壊されている可能性がある。

S1・S2とS4間には、SD12をまたいで、S3が検出された。位置的なことから、S1・S2とS4をつなぐ根太の基礎であらうか。

S7～S10あたりの石は傾きが顕著であった。堀埋土上に造られたため、地盤の沈下などがあるのであらうか。こうした類例が待たれる。

扉を受ける礎石は、大きさからS4・S6であらうか。ただし、S5の意味が不明になる。一方、S5が扉部の礎石とすると、その大きさが気になるところである。

西側に土塁が本来あった可能性が高いことは前述したが、東側の土塁と、西側の土塁に挟まれた形になるため、櫓門状構造の可能性が高いであらう。石塔の有無では異なるが、門側面の礎石間に石列を配する構造や、石畳がないことなど、郭馬出西虎口と極めて似ている。また、両者とも、造り替えが認められないため、1時期の使用になるという点でも共通しているのは、注目される成果である。一方で、郭馬出西虎口では硬化面が検出されたが、本丸北虎口では確認されなかった。また、礎石の配置も郭馬出西虎口とは若干の差異が認められ、そうした、異なる面もあることは、注意しておきたい。

この虎口では大量の石塔が使われていた。石垣・排水溝・礎石の栗石の部材など全てを含めて、北虎口で使われたのは101個に上る。南側の残りが悪いことを考えると、石塔は本来その倍弱程度、使われていた可能性も考えられなくもない。これら石塔の旧来あった位置なども課題である。なお、1点の牛伏砂岩を除くと、地元で取れる角閃石安山岩と輝石安山岩が使われていた。石塔中年号が刻まれていたのが1石(PL98)あり、「寛正二年」銘があったが、門の構築年代を押さえるには至らなかった。なお、門自体は最上面の遺構のため、城最終時に使われている門である。

②2号堀・3号堀（第149・150・152～161・172図）

本丸の北西部約1／3の部分で確認された堀跡である。

2号堀の南東側堀壁面上端はG3グリットの049T（第172図）、F5グリットの031T（第161図）で確認され、F5・F6グリット（第161図）、E6グリットの066T（第160図）でも確認された。この堀を埋めた土は、G3グリット049T（第172図）、F5グリット031T（第161図）のセクションでは、版築状に細かい互層状に埋められていることが確認された。そして、両セクション共に、細かい互層状の土層を切って、さらに埋められている土層が確認されていることから、2号堀を細かく互層状に埋め戻し、さらに1度掘り返して、新たな堀（3号堀）を造り直していることがうかがえた。3号堀の南東側堀壁面上端は、概ね2号堀と平行しているが、E6グリット0414T中央部で、2号堀と重なり、クランクして、北西方向に伸びている（第160図）。2号堀を埋めた土は版築状の細かい互層であるが、川越城跡の調査で、同様な堆積状況の土層が確認され、堀の掘り直しに伴う土塁構築のための盛土との解釈がなされている（栗岡他 2005）。箕輪城も同様な可能性を指摘できるが、3号堀南東側壁面上端に平行して、柱間隔が120～130cmのピット列（SA3）が確認されている（第159～161図）。このSA3は3号堀と平行していることから、同時期と考えられ、柵列の可能性が高いであらう。柵列とした場合、2号堀を埋め戻した土は土塁構築のための盛土と考えるより、むしろ、3号堀壁面維持のための版築状の埋土と考えたほうがよいかもしれない。

2号堀埋土には、ローム層の下層にあたる白川火砕流土を主体にした層が認められたが、3号堀の埋土は、地山の上部にあたるローム～黒色土の土で埋め戻されていた。地山上部の土で埋め戻されていることから、堀を掘削した際に出た土で埋めたというよりも、曲輪の削平で生じた土で埋め戻されたといったほうがよいであらう。2号堀埋土は概ね水平に堆積し、3号堀

埋土は調査地点によって堆積方向に統一性がない。そのため、どの方向から埋めたのかは明らかではない。3号堀埋土中で土層が切られている箇所がE6グリットの0412T（第154図）、E5グリットの0412T（第155図）、E3グリットの0412T（第156図）、D5グリットの037T（第149・150図）で認められた。堀埋土最上部のみの調査で、堀全体の土層がわかっていないため、評価は慎重に行ないたいが、堀の掘り返しや何らかの遺構の可能性が考えられる。

2号堀・3号堀とも南東側のラインはある程度判明したが、対岸部分は不明確になり課題として残った。C3グリットの049T、0413Tでは堀壁面が確認され（第153図）、続きと推測される落ち込みがD4グリット0421Tの南東端でも確認された（第152図）が、その先は不明である。本丸北虎口部分は堀埋土であったが、064Tでは表土を剥ぐと地山だったため、064Tまで堀は伸びていなかったことになる。北虎口周辺で、クランクしている可能性があるだろう。

2号堀埋土からは出土遺物が全く無かった。また、3号堀埋土中も出土遺物は非常に少なかったが、わずかに青花皿（26）、かわらけ（337）の出土がわずかにあった。

④本丸中央部（第159～168図）

年度をまたがり本丸の中央部を調査し、いくつかの成果が上がっている。

本丸の虎口部分は大量の石によってパックされていたため、遺構の残りは極めてよいが、その他の場所は、廃城後の耕作によって、最上面の残りが極めて悪い状況であった。そうした中でも、本丸中央部は比較的残りが良かったといえる。特にG5グリット西端付近では表土（耕作土）が薄く（第165図031T-G5セクション図）、最も薄い場所では、15cmほどの厚さであった。これは、耕作が深く及んでいないことがうかがえ、事実、表土が薄い場所を中心にして、SD8、SD9が検出された。とはいうものの、SD8・SD9共に、溝底石が途切れ途切れに検出され、さらには溝側石まで残っていた場所はあまりなかった。溝側石が1段のみの高さであったと想定した場合、城最終時の地表面は表土を取り除いた面の高さから約10cm上になり、基本的には、城最終時の地面は残っていないと考えなければならないであらう。こうしたことを踏まえると、調査で検出された遺構は、耕作の影響が小さかった、あるいは、耕作が及んでも、その遺構の下部が残ったことによって検出されたと考えてよいのであらう。

・S1～S47（第159図）

G5・G6・G7・F7グリットを中心に、径5cmほどの小礫が集中し、周囲の土のしまりが強い遺構が検出された。本丸北虎口の礎石は、栗石も検出され（PL96）、基本的に礎石下に栗石を入れていたと考えられることから、G5・G6・G7・F7グリットを中心に検出された遺構は、礎石の下に栗石がわずかに残ったものと想定できる。そのため、これらの遺構は礎石を意味するSをつけて表記した。これらの中には、石が全く検出されなかった遺構（S11）もある。S11を除いたS1～S47はしまりが強く、根固めがなされていた可能性が高い。同様にS11はしまりが強いいため、いずれも礎石があった可能性を指摘できる。第159図には、S1～S47までの遺構を点線で結んでいる。前述しているように、耕作によって残りは悪いため、本来は他にも相当数の遺構が存在した可能性は強く、あくまで、調査で検出された遺構を結んだものであり、建物を明確には認定できていない。G5グリットを中心にしたS1～S16は長方形プランになっている。ただし、S11から南東方向へS17・S18・S20と伸びるラインがあり、何らかの建物と接続していた可能性がある。その他、G7グリットにおいても直線的につながるラインが10本有り、何らかの建物が想定される。これらの軸はSD7・SD8・SD9と軸が全く同じであり、同時期の可能性が考えられる。SK10の埋土上面に掘り込まれたS26、SK1埋土上面に掘り込まれたS33や、その他ピットとの切り合い関係では最も新しい遺構であり、城最終時期の遺構の可能性が極めて高い。なお、柱間はS7～S10のラインを除き、すべて、197cm前後の間隔であり、6尺5寸だった可能性が高い。

・P246・P244・P255・P266、P350・P366・P374・P400、P378・P380・P392（第159図）

本丸中央部では多数のピットが検出されている。これらピットのほとんどは地山面において

確認されたピットのため、築城時から廃城時までのピットが多数重複しているものと考えられる。平面確認において、これらの重複関係を認定できないものも多かったこともあり、明確に掘立柱建物を認定できたものはなかった。そうした中で、G5 グリットの P246・P244・P255 は 220cm 間隔で直線的に並び、P266 は P255 から 200cm の間隔であるが、P255 から直角の位置にあり、これらが一連の建物の一部の可能性が考えられる。ただし、P248 の延長線上の G4 グリット 045T（第 164 図）、及び P266 の延長線上においてもピットは確認されていない。H5 グリットの P350・P366・P374・P400 は小礫を含むしまりの弱い覆土で共通し、170cm 間隔で並ぶが、続きのピットは確認されなかった。P378・P380・P392 のピットは、焼土を多く含む覆土で共通し、直線的に並ぶが、続きは確認されていない。

・SD8・SD9（第 167 図）

G5 グリットで検出された石組溝である。SD8 は北東から南西方向に走行し、G5 グリット西端で、南東方向へクランクしている。クランク箇所から南東へ約 50cm の場所で SD9 と交わるが、この場所では、SD8 の側石が残っていた（第 167 図 E～E´）。そのため、SD9 を壊して、新たに SD8 が造られていることが判明した。最も良く残っている場所で幅 35cm、深さ 10cm の溝である。SD9 は SD8 と平行して検出された溝で、両側の側石が残っている場所がないため、幅・深さとも正確には不明であるが、SD8 とは使われている石の大きさは大差が無く、規模は同等だろう。

・SX5・SD7・SX37（第 168 図）

G5 グリット南東部から G5・G6 グリットの境付近、及び H5・H6 グリットの境付近で確認された遺構である。

SX5 は 80cm×100cm の方形の掘り込み状遺構で、径 2～5cm の小礫が敷き詰められていた。この遺構の北東側には径 20～30cm の石が敷かれており、SD7 から続く石の可能性がある。また、南西側には石が無かったが、SD7 の延長ラインで窪んでいる。SD7 の北東端は南東側の側石が残っていないなど、残りが悪いことから、元々は SD7 が SX5 までつながっていた可能性が考えられよう。SX5 は遺構保全のため断ち割り調査を行なっていないが、SD7 底面より 10cm レベルが低くなることから、水貯用の遺構、あるいは、浸透用の枡などの可能性が考えられる。

SD7 は良好に残っている場所で幅 15～25cm、深さ 10～20cm である。SX37 に向かって溝底のレベルが下がるため、水は一度 SX37 に集まることになる。SX37 の南東側には溝底の石と想定される石敷きが確認されている。石敷きに沿って、攪乱があり、抜き取り痕の可能性が強く、やはり、溝の底石であろう。そのため、この石敷きも SD7 の続きとしてとらえて、同一遺構名をつけている。ただし、SX37 からは 20cm ほどレベルが高くなり、調査区南東端部では、SX37 南東隣接部分と比較して 5cm ほどレベルが低くなることから、水は南東方向へ流れていた可能性が考えられる。SX37 はレベルが異なる 2 条の溝をつなぐ場所であるが、SX5 同様に底に小礫が敷き詰められている遺構である。SX5 同様、断ち割り調査を行なっていないが、水貯用の遺構、あるいは、浸透用の枡などの可能性が考えられる。

・SD20（第 162・163 図）

G7 グリットで確認された石組溝である。G7 グリット北端で、1.7m にわたって、溝底石のみが検出された。この溝の延長線上の北西方向、及び南東方向へ、攪乱が続いており、溝の抜き取り痕と推定される。G7 グリットの南東端では、SD20 延長線上に 1 段の石垣が確認されているが、溝の延長線上にあたるため、溝側石の可能性が考えられ、この石垣も SD20 としている。なお、この石垣を境にして北東側は盛土になっている。

・F7・G7 グリット SK17・SK19・SK21・SK22・SK24・SX19・SX20（第 162・163 図）

F7 グリットの SK17 は調査範囲内で 3.22m の幅があり、円形のプランを呈する大形の土坑である。出土遺物はない。

F7 グリットの SK19 は調査範囲内で最大 1.34m の幅があり、深さ 38cm の不定形の土坑である。出土遺物はない。

F7 グリットの SK21 は調査範囲内で最大 2.4m の幅がある。径 3～5cm の小礫が確認面では混

じっていた。サブトレンチ箇所では、ピットと重複していることがわかり（第 163 図 SP.G～G´）、遺構確認プランとは異なっているだろう。出土遺物はない。

F7 グリットの SK22 は 165cm×175cm の円形プランの土坑で、確認面からの深さは 1.3m と深い。出土遺物はない。

SK24 は F7 グリットと G7 グリットにまたがって検出された土坑で、覆土最上面には、S30・S31 の遺構がある。3.3m の円形プランで大形の土坑である。サブトレンチ箇所を確認された深さは、確認面から 75cm である。出土遺物はない。

SX19 は G7 グリットで広範囲にわたって確認された遺構である。ただし、サブトレンチによる結果（第 163 図 SP.K～K´SP.I～I´、SP.J～J´）では、深く掘り込まれた箇所は、確認面より狭くなる。盛土層が数 cm 残っていた場所の可能性なども考えられる。SX20 は SX19 を切っている遺構で、不定形であるが、土坑であろう。出土遺物はない。

・G5・G6 グリット SK1・SK2・SK10・SK58（第 164・165 図）

G6 グリット北部で確認された SK1 は 2.38m の円形プランで、確認面からの深さ 0.8m の規模である。断面観察の結果（第 164 図 033T-G6 セクション図）、SK1 に切られている土坑である。275 のかわらけが SK2 で出土したものと接合関係をもって出土している。

SK2 は、SK1 を切っている土坑で、275 のかわらけと 12 の青花皿が出土している。

SK10 は、G6 グリット東端で確認された土坑である。底面で深さ 4cm ほどの落ち込みが 2 箇所確認されている。出土遺物は、292、304、354 のかわらけ、816、817、818、822、823、824、831、834、836、837 の取瓶、及び SK28 で出土したものと接合関係がある 830 の取瓶が出土している。

SK28 は、821・832・835 の取瓶、833 の埴塙、鉄滓が付着した瀬戸美濃の皿（76）が出土している。SK10・SK28 共に、取瓶が出土し、また、接合関係の認められるものが出土しており、両者の関係性がうかがえる。

SK58 は、SK28 に隣接した土坑で、径 5～10cm の石が底面付近に集中していた。出土遺物はない。

・H5 グリット SK4・SK5・SK11（第 166 図）

SK4 は H5 グリット北西端で確認された土坑である。確認面からの深さは 38cm である。中央部に盛り上がる箇所が認められた。出土遺物はない。

SK5 は H5 グリット西端で確認された土坑である。断面観察（第 166 図 H5SK5・SK11 セクション図）の結果、SK5 が SK11 を切っていることが明らかになった。覆土最上層で 280～282、385 のかわらけが散在して出土している。

SK11 は SK5 に切られている土坑であるが、ピットとも重複している。多くのピットは切り合い関係が不明であったが、P377 には切られていることが、断面観察（第 166 図 H5P377・SK11 セクション図）の結果で明らかになっている。

・G4 グリット SK41（第 164 図）

G4 グリットで確認された SK11 は確認面で 5～10cm の礫が散在して確認された土坑である。確認面からは 265～268 のかわらけがまとまって出土している。

⑤H7・H8 グリット 032T（第 169 図）

H7 グリット北東側約 2／3 は薄く盛土が確認された。P273 は盛土を切っていないため、この盛土は P273 よりは新しくなるが、時期は不明である。

H8 グリットでは、土塁部分に石垣が 2 条確認された。本丸南虎口から続く SV7 であるが、本丸南虎口の場合、4 条確認されているため、未調査部にも石垣がある可能性が考えられる。

⑥H3・H4 グリット 032T（第 170・171 図）

盛土層がほとんど無いことも有り、ピットが多数確認されている。これらのピットは盛土層

が無い為、築城時から廃城時の全ての時期を考慮する必要がある。ただし、H4 グリットの SX2 と重複している P429・P432 は断面観察から SX2 を切っているピットのため、SX2 より新しい遺構である。なお、P429・P432、さらに、P446 はほぼ 180cm 間隔で並ぶため、掘立柱建物の一部の可能性はある。その他のピットは明確に並ぶものは無かった。

SK53 は H4 グリットで検出された土坑で、調査範囲では幅 1.3m、確認面からの深さは 95cm である。360 のかわらけと 399 の内耳土器が出土している。

SX2 は H4 グリットで検出された遺構で、調査範囲では幅 3.2m、北西側の下段部の深さは、確認面から 70cm、南東側の上段部は、確認面から 40cm の深さである。段差があるがセクションから切り合い関係は認められず、同一遺構である。なお、P430・P431 はこの遺構に伴うピットである。この遺構からは、小破片のかわらけが大量に出土しているが、ほとんど接合せず、図化できたのは極一部になる。6 の青花皿、64 の青磁・稜花皿、66 の青磁碗、261・313～315・327・330・377 のかわらけ、397・425 の内耳土器、519 の播鉢と思われるものが出土している。

SX1 は H3 グリットで確認された遺構である。調査範囲では幅 3.3m、深さは確認面から 40cm である。断面観察から判断される切り合い関係は、P460 は SX1 に伴うピット、もしくは、SX1 以前のピットで、P452 は SX1 より新しいピットである。その他の重複しているピットとの新旧関係は不明であった。264、333 のかわらけ、517 の播鉢と思われるものが出土している。

SK8 は H3 グリットで検出された遺構で、幅 2.0m×1.15m、深さ 95cm の土坑である。246 の常滑の甕と 323 のかわらけが出土した。

SK7 は H3・H4 グリットの境で検出された土坑である。径 10cm ほどの石がまとまっている。

⑦H2 グリット 032T（第 172 図）

ほぼ全体が薄い盛土層になる。P478～P482 は盛土が極めて薄く、遺構確認する中で、地山まで削ってしまった場所で確認されたピットで、盛土層下のピットである。一方、P483 は盛土層を切っているピットになる。

⑧I3 グリット 049T、I5 グリット 031T、I6 グリット 0415T（第 173 図）

I3 グリット 049T では、盛土層中で炉跡が検出されている（SX31～SX34）。鉄滓等、鍛冶に関わる遺物が少量ではあるが、出土しているため鍛冶炉の可能性が高い。なお、このトレンチでは遺構保全のため、炉跡が検出された層より下層の調査は行っていない。

I5 グリット 031T は、トレンチ箇所すべてで表土を剥ぐと盛土層になった。盛土層を掘り込むピットが 1 箇所確認されたが、基本的には、盛土層上では遺構が確認されなかった。盛土層直下ではピット、土坑が掘り込まれていたが、これらの遺構はすべて、遺構自体が埋められた後に盛土されたのではなく、遺構自体が開口した状態で短期間に埋められたような土層状況であった。あまり例をみない盛土の状況であるが、木俣地区の I20～I23 グリットの 1T（第 135 図）でも、近似した堆積状況が確認されている。隣接調査区とはベルトを挟むため、盛土がどのようにつながるかが不明で、この調査部分は課題が多い。8 層で 308 の小田原産と推測される手づくねかわらけが出土している。

I6 グリットの 0415T では、表土を剥ぐと As-B 付近の地山になり、ピットが確認された。

⑨J7・J8 グリット 0416T（第 174 図）

J7 グリットでは、トレンチ中央部の北西側で石が敷かれた形で検出されている。隣接する J6 グリットの SD21 の延長線上にあたり、溝底石の可能性が考えられる。

J8 グリットでは、本丸南虎口から続く SV7 が検出された。階段状に積まれた石垣である。

⑩第 10 図 J6・K6 グリット 034T、044T、035T（第 175～180 図）

J6 グリットの 034T では表土を剥ぐと As-B になる場所が多かったが、この場所以外の 0414T、及び 035T は盛土層になった。SD6 及び、SD2 は盛土層を切って構築された石組溝であり、また、

他の遺構との切り合い関係から、最新の遺構になる。SX4 は石畳であるが、北東から南西へ続いている。SD6 と交わる場所では、SD6 に切られており、SD6 より古い遺構になる。また、特に、044T のセクション（第 176 図 044T-J6 西壁セクション図）で顕著であるが、SX4 を覆うように盛土層があり、本来は盛土層中の遺構である。耕作が深く及び盛土層が削平された場所で、表土を剥ぐと一部の石が露出するという状況である。J6 グリット 035T におけるサブトレンチ箇所では SK54 と重複していた。SK54 が深さ 150cm と深い土坑のためか、その堆積土の埋没によってこの場所だけ、SX4 は陥没している状況であった。

SD4 は SX4 同様に SD6、及び SD2 に切られている。SX4 同様に本来は盛土層中の遺構と想定されるが、耕作によって盛土層最上部が削平されたため、表土を剥いだ面で確認されたものと思われる。

SD6 は 044T の南東端 3m 付近でクランクする。クランクして南西方向へ伸びていく。この南西方向へ伸びる溝を SD2 としているが、SD6 と同一の溝である。SD6 の北西端部分は残りが悪く、不明な部分が多いが、J6 グリット 034T の断面観察（第 176 図 034T-J6 北壁セクション図）から P530 付近で、表土に近似している土が、地山もしくは、ピット覆土を切っている状況が確認できる。このことから、溝の抜き取り痕の可能性が考えられ、第 175 図ではその場所に点線で溝のラインを推定している。なお、このラインを延長すると、本丸中央部の SD7 につながっていく。SD2 は、崩された石と推測される径 10～20cm の石が多く出土しており、特に、この延長上の K5 グリットの 043T（第 177 図）の土層観察では、周囲の土を削平しながら、この溝を埋めている状況が確認された。なお、043T 部分では、崩された石を除去していない。

SD6 からは、101 の初山大皿、130 の瀬戸美濃の口広有耳壺、135・139 の瀬戸美濃の水差類、227 の常滑の甕、287、289、290、293、338、347、349、355 のかわらけ、431 の内耳土器、470 の火鉢、760、772 の釘、787 の小柄が出土している。なお、101 は 1 箇所にとまって出土（PL125）し、287 ともまとまって出土した。SD2 からは、221 の常滑の甕、426 の内耳土器、605、606 の石鉢、611、623 の石臼、699 の五輪塔が出土している。

⑪本丸南虎口（第 180～182 図）

調査前から、両側の土塁にはさまれる形で開口しており、虎口があることが想定されていた。この虎口を出ると本丸馬出に至り、さらに土橋をわたると二の丸に至るようになっている。

調査を始めると、大量の礫が出土した（PL106）。他の虎口と同様に、虎口周辺の石垣を壊し、虎口部分が封鎖されている状況であった。これらの礫を除去すると、石畳や排水溝、石垣などが姿を現した。

この虎口では、大きく 3 時期にわたる変遷が確認された。南虎口Ⅰ期は SV1 の時期である。この地点の調査では、SV1 の根石まで掘り下げて調査しなかったが、昭和 57 年の調査地点、031T の状況、ピンボールによるボーリング調査などから、さらに 1 石程度下層に積まれていることが確実である。曲輪内の変遷ではⅡ期もしくは、Ⅲ期の面の遺構になる。南虎口Ⅱ期はこの石垣を 20cm 程度埋めて曲輪のかさ上げを行い、石畳・SD1・SD17 を築いていることがわかった。この時期は曲輪の変遷ではⅢ期にあたる。この時期が虎口として使われていた場合、石畳の幅は 8.5m になり、かなり大規模な虎口であった可能性もある。SD17 の東側の側石にはこの時期の礎石になる可能性もある大きめな石が 1 個使われているが、門構造は明らかではない。南虎口Ⅲ期は SD17 を埋めてこの溝の上に石垣（SV3、SV14、SV13、SV2、SV7）を築き、S1・S2 の門礎石を据えた時期にあたる。SD17 が SV3・SV14 に覆われる場所は SV3 の根石が暗渠の蓋石状には積まれていないため、南虎口Ⅲ期には SD17 が埋められ、機能していなかったのであろう。なお、南虎口Ⅲ期については、廃城後の遺物を含む土が直上から覆っているため、廃城直前まで機能していたことになる。

S1・S2 が南虎口Ⅲ期の門礎石にあたる。礎石を据えた後に石垣を構築しているため、若干礎石の上に石垣がのっている。S2 については、礎石とするには石の大きさが小さいが、SV3 のラ

インからはわずかにずれているため、礎石の可能性は高いであろう。また、S2 南側にも大きめの石があるが、石畳のレベルより上になり、石垣が崩された石の可能性が考えられる。本来は、S1・S2 と対になる礎石が 2 石あり、SV13 と SV2 をつなぐ石垣と SV3 と SV14 をつなぐ石垣があるはずであるが、虎口南側は攪乱が激しく、残っていなかった。通常の門は、SV2・SV14 のラインから 50cm 程度曲輪側に入ったところに位置するが、ここでは、SV2・SV13 間、及び SV3・SV14 間の 2.7m 以下の位置にあったと想定しておく。なお、S1・S2 間が芯々距離で 2.57m になるため、門の幅は 2.57m、奥行は 2.7m 以下になる。門の構造は、4 本柱であることから、薬医門のような門であることが想定できるが、門両側の石垣が、本来土塁天端程度の高さであった場合、両側の石垣にまたぐ形の櫓門状の門である可能性も想定できよう。

石畳は SD1・SD17 に囲まれた内側に敷かれているが、SD1 北東端部分で、曲輪内に伸びる石畳が検出された。石畳の両脇が残っている場所は少なかったが、エレベーション E ライン付近から南側 1m 程度にかけては、両脇の石の面がそろっているため、この場所を元にすると、石畳の幅は 2.05m になる。北側に行くにつれ、残りが悪くなる。この延長上の 0416T・035T では続きがないため、どのように曲輪内へ続いていたかは不明である。

SV7 は残りが良い場所で 4 段に積まれている。1 段目の SV7a と 3 段目の SV7c は比較的高く、最大高で SV7a は 73cm、SV7c は 70cm になる。2 段目の SV7b は最大高で 52cm、4 段目の SV7d は 30cm である。三の丸地区などの調査では、このように階段状に石垣が築かれる時期は、最終時期の前段階であったが、本丸の調査では、表土を除去した面で検出されていることから、最終時期に使われたことになる。二の丸・三の丸の階段状に積まれた石垣と比較すると、SV7 の石は大きいが、その他の点で明瞭な違いは認められないことから、城最終時期の前段階から城最終時期にかけて継続して機能していたことを視野に入れ、今後更に検討していかないとけないであろう。

この虎口においても、石塔が 15 個、石垣や石畳の一部で用いられていたが、本丸北虎口・西虎口に比べると非常に少なかった。

⑫本丸馬出部（第 183～189 図）

本丸馬出部では、基本的には盛土層上に遺構が構築されていた。この盛土は、本丸南東側の 1 号堀埋土で主体的な白色系の火砕流土が多く、堀の埋土の可能性が高い。盛土層が厚く、サブトレンチにおいて調査の安全性を考慮し、最大で現地表から 1.7m ほどまでしか掘り下げしていない。そのため、1 号堀の南東側壁面上端が盛土層直下にあり、現地表から 1.7m 以下の場合、1 号堀南東側壁面上端は確認できていないことになる。ただし、09・P9 グリットの 054T では、SV15 の裏側にあたる南東側で地山が確認されている（第 188 図 054T09・P9 セクション図）ため、1 号堀の南東側壁面上端はこの場所より北西側であることはわかっている。本丸南虎口の SD17 が延びていく位置に設定した 053T（第 184 図）では、確認面からの深さが 60cm の落ち込みが確認されている。この覆土には径 3～5cm の小礫が隙間なく大量に充填されていた。落ち込み自体溝になるか土坑になるか不明である。SD18 と南虎口の溝との接続関係が不明であるが、この落ち込み底面と SD18 のレベル差がないため、大量の石が充填されていたことを踏まえると SD17 から流れ落ちた水を浸透させる何らかの施設で、SD18 とも接続していた可能性も考慮できる。0418T で検出されたのは SD18 である（第 185 図）。基本的に側石は残ってなく、底面の石が残っていた。ただし、08 グリットでは側石も残っていた。基本的には、南東方向へ傾斜している。

SV15 は、08・09 グリットの 054T 及び 09 グリットの 0417T で確認された石垣（第 188 図）で、階段状に 2 条積まれている。土塁基底部の石垣で、この石垣を覆うように盛土がされているため、城最終時期には使われていなかった石垣である、なお、08 グリットで、続きが確認されているが、石畳によって切られている（第 186 図）。

07・08 グリットの馬出虎口部（第 186・187 図）では、本丸南虎口から、南西方向へ続く SD18

がクランクして、本丸馬出西側に水が流れていくように造られていたことが溝底のレベルからわかった。SD18 の底は、石畳のレベルより高い部分があり、また、溝側石は石畳の面より完全に浮くような形で検出されている。石畳のレベルから上に 15cm 程度のあたりから、やや色が変わっている層があったが、色やしまり具合はさらにその上の表土と近似していた。ただし、SD18 が石畳から浮いてしまうことを踏まえると何らかの面の可能性が残されているが、この層上面では礎石等の遺構は全く確認されなかった。

可能性として、石畳の面が 1 時期あり SD18 が造られ、石畳上に盛土されているという時期変遷が考えられる。また、他の虎口においては門の中に排水溝が配置されていることから、この石畳があった時期は現在堀になっている南西側から進入する虎口形態の可能性も考えられる。

⑬J5・K5 グリット 031T・034T（第 190・191 図）

J5 グリットの 031T では、盛土層中に SX4 が検出されている。J6 グリットで検出されている石畳の続きである。何らかの通路と考えられよう。

K5 グリットでは SD3 が壊され、SD2 が構築されていることが判明した。この新旧関係では、使われる石の大きさも含めて、新しくなると溝の規模が大きくなっている。SD2 上層は大量の石が廃棄された状態で出土している。こうした石を多く含む 5 層（第 191 図 031T-K5 セクション図）は、この溝を埋める際に周囲の土を削りながら、埋めた層であろう。

⑭L5・M5 グリット 031T（第 192・193 図）

L5 グリットの SX3 は盛土層最上面で確認された遺構で、径 20～30cm の石がまとまって検出されている。当初、石組井戸などの可能性も想定したが、東側の外周部の石は外側に面を持っており、井戸にはならないであろう。その性格は不明である。

L6 グリットの SK12 は盛土層最上面で確認された遺構である。盛土層中に構築されている SV1 を切って造られているため、SK12 部分の SV1 は残っていなかった。セクション設定場所が遺構の外周部であったため、正確な深さは不明である。また、安全上地表下約 1.5m のところで、遺構の掘り下げを断念している。円形プランで深いため、土坑ではなく、井戸の可能性も考えられる。

⑮1 号堀（第 181・182・192 図）

L6 グリットの 035T（第 181・182 図）、及び L5 グリットの 031T（第 192 図）で確認された。この中間地点に当たる昭和 57 年の調査地点においても確認されているが、昭和 57 年調査分については今報告で省略している。L6 グリットの 035T では北西端約 2m で、北西側の As-B 混じりの黒色土を切る形で、黄色や白色土を主体にした土が堆積している状況が確認された。また、L5 グリット 031T でも同様に As-B 混じりの黒色土層が切られ、白色土が主体の堆積が認められた。L5 グリット 031T ではこの切られている部分の盛土層最上面に別の遺構（SX3）が構築されていたため、調査においてはこの遺構保存のため、一部の落ち込み部分しか確認していないが、L6 グリット 035T と同様な土層状況であることは確認できているため、この落ち込みは L6 グリット 035T の落ち込みラインの延長部と考えて問題は無いであろう。

⑯M3・M4 グリット 048T・049T（第 194 図）

この付近は 1 号堀の延長ライン上に概ねは位置するが、表土が厚い場所も多く、盛土層の掘り下げは深くはできなかった。そのため、1 号堀の埋土か、単なる盛土層であるかは明確ではない。M4 グリットの SV8 は土塁基底部の石垣と思われ、3 石積まれている。盛土層中の遺構であり、城最終時期には埋められている遺構である。SD15 は溝底石と側石が 1 石のみ残っていた石組溝である。この溝の延長ライン上のトレンチでは、続きがないため、本丸内のどの溝と接続していたかは全く不明である。

M3 グリットの 048T では、中央部で上幅 6.55m をはかる巨大な落ち込みが確認されている。周囲の盛土層を切っていることから、何らかの遺構であろうが、安全上のため、底面までは全く調査していない。なお、25 層対応のレベルから 180 の瀬戸美濃の播鉢が出土している。盛土構築年代の重要な手がかりを得られる資料である。

⑩M2 グリット 048T（第 195 図）

盛土層中に SD14 が検出されている。溝の底は石ではなく土である。M3 グリットの 048T で確認された巨大な落ち込みによって、明確ではないが、レベル的には M4 グリット 048T の SV8 の構築面に対応する遺構である。この溝の構築面は南西側にいくにしたがい、盛り上がっており、溝は土塁裾を巡る排水溝の可能性がある。

⑪N3 グリット 049T（第 195 図）

2 層から 11 層までは、しまりが弱く、1 層の表土も混ざる土のため、南東側の土塁を崩した土と判断している。土塁裾の排水溝はなかった。

⑫L3 グリット 049T（第 195 図）

盛土層が全面で確認され、特に遺構はなかった。隣接する K3 グリット 0311T で検出された SD2 構築以前の盛土になるが、7 層相当レベルで、小田原産の手づくねかわらけ（306）が出土し、盛土及び SD2 構築時期を検討する上で重要な資料である。

⑬J2 グリット 047T（第 196 図）

土塁裾を巡る SD10 が検出されている。本丸西虎口からの続きの溝である。北西方向の延長ライン上の H2 グリットの 032T では続きの溝が確認されていないため、北西方向の溝の続きは不明である。

⑭J3 グリット 049T（第 196 図）

隣接する I3 グリット 049T の炉跡が確認された同じ面で、炉跡が検出されている（SX35・SX36）。この面と同一面で石畳の SX4 が検出されたため、炉跡と SX4 は同時期になる。

⑮K4・K3 グリット SD2（第 197～200 図）

K6 グリットで確認された SD2 の延長部分が確認されている。K4 グリットの中央部までは底に石が敷かれているが、それより南西では底は土になる。また、その違いに対応するように、側石の積み方も変わり、底石がある部分では、控えが長い小口積みになっているが、底石がない部分では、全般的に控えは短い傾向にある。また、底石がある部分は K5 グリットの 043T で顕著に認められたように周囲の土を削りながら、土と石が混じって、埋め戻されたような堆積状況をある程度示し、168 の軟質施釉陶器が出土している。底石がない部分は大量の石が詰まっているような埋め戻し状況（PL103）で、98 の瀬戸美濃の丸皿、197、199、204、210 の常滑の甕、283～285、295、384 のかわらけ、629 の石臼、671 の五輪塔、666、741 の石幢、743 の宝篋印塔、813 の鉄滓が出土している。なお、常滑の甕を中心に周囲の盛土層内から出土したものと接合関係が認められるものもある。

この溝で大量に出土した石の量から判断すると、本来は現状より数石分高かった溝の可能性があるだろう。

⑯本丸西虎口（第 201～203 図）

本丸の西側端の一部で、浅野文庫絵図では、この虎口から蔵屋敷に渡る橋が描かれている。現状では、この虎口西側の堀内は、本丸とは比高差があるものの、土橋状に盛り上がっている。

調査前から堀東側最上部に礫が散見され、石垣等の存在が予想された。調査を進めると、これらの礫は廃城後に廃棄されたものであることがわかってきた。虎口西側は石畳状に高めて廃棄されていた（PL45・98）。ただし、堀側の部分には石垣等は検出されていない。また、この礫層直上面には溝・石垣・柱穴などの遺構は全く確認されていない。そのため、この礫層の一部にトレンチを入れたところ、礫層直下で石畳などの遺構が検出された。礫層上面で遺構がないことから、虎口部分に大量に廃棄された石であることが想定された。こうしたことから、礫層を除去したところ、S1・S2・S3・S4 の礎石や石垣・排水溝等門に関わる遺構が検出された。

この虎口は大きく 2 時期にわたる時期変遷が確認された。西虎口Ⅰ期は、石畳（1 号石畳）が虎口内全面に敷かれている時期である。礎石・石垣・排水溝などはほぼ全てこの時期に造られている。ただし、2 号石畳直下は、幅狭なサブトレンチによる調査のため、西虎口Ⅰ期の遺構については不明な点が多い。西虎口Ⅱ期は、門南側を中心に盛土され、2 号石畳が敷かれる時期である。2 号石畳は幅 0.92m に敷かれている。本来東側へ伸び、曲輪内に至る通路として利用されていたものと推測されるが、東側は完全に残っていなかった。S3～S4 間はトレンチ調査により、西虎口Ⅱ期の盛土を除去しているため、西虎口Ⅰ期の石畳が顔を出しているが、西虎口Ⅱ期には盛土下になっている。盛土は西側～北西方向に行くにつれて薄くなり、S1・S2 周囲では、盛土されていなかった。礎石上には盛土されていないため、西虎口Ⅰ期のものを継続して使っている。また、石垣・排水溝なども同様である。

S1～S4 の箇所が門のあった場所になるが、この部分だけ門に取りつくように石垣が飛び出している（SV9～SV12）。これら石垣の残りは悪いが、本来は礎石際まであった可能性は考えてよいであろう。

排水溝は SD2 が本丸内から続いてきて、SV 5 付近で暗渠へと変わる。暗渠にしてあるのは、門脇のみであり、SV11・SV12 の根石も兼ねるために暗渠にしたと推測される。暗渠は S3 付近を過ぎると、再び開口し、門前面の雨落ち溝である SD16 と接続し、本丸西側の堀へと伸びていく。レベル的には、本丸西側の堀へ水が落ちることになるが、溝西端が残っていないため、どのように水を落としていたかは不明である。この他、本丸西側の土塁沿いにあったと推測される SD10 があるが、この溝は虎口と接続した後の水の流れが不明である。

門北側と南側には土塁状の高まりがある。047T・048T の調査でも、土塁の続きが確認されており、本来、本丸西側には土塁があったものと思われる。ただし、土塁の残りが良いのは虎口付近のみであり、その他の箇所はかなり削平されている。

門礎石は S1・S2・S3・S4 になり、芯々距離で S1～S2 間が 1.48m、S3～S4 間は 1.48m、S1～S3 間は 2.87m、S2～S4 間は 3.06m である。4 本柱のため、薬医門のような門が想定されるが、両側の石垣が本来土塁天端付近の高さまであったとするならば、石垣をまたぐ、櫓門のような可能性も考えられる。

この虎口では、北虎口ほどではないが、大量の石塔が石垣の部材などに用いられていた。第 201 図の範囲内では 57 個の石塔が使われていた。その他、門上層の石廃棄層中にも石塔が散見され、相当量の石塔が使われていることになる。銘文が刻まれているのは、3 個あり、1 個は判読できなかったが、SV4 東端の五輪塔地輪には、応永 29 年銘が刻まれていた。また、SV10 の裏込石内の石塔（種別不明）には「本願大屋」という 4 文字が刻まれているものがあつた。

⑰本丸・蔵屋敷間部（本丸西堀部）（第 204 図）

浅野文庫絵図には本丸西虎口から蔵屋敷へ渡る橋が描かれ、現地形でも本丸西側の堀内で、この付近だけが地形的に高く、橋の架かることが想定された場所であつた。

調査を進め、表土を剥いていくと、斜面最上部では、地山の黒色土、もしくは、黒色土直下のローム土が確認されたが、西虎口調査箇所から南西に 1～2m 程度のところからは茶褐色土で、ロームが多量に混じりややしまりのある土になった。当初は、堀を埋め戻した土と判断し、やや掘り進んでいったが、しまりのあることから、橋脚部の盛土であることも考慮し、念のため

にこの土を残して斜面下部に向かって表土だけを剥いでいくことに努めた。その結果、堀底では、最大径 80cm 程の大きな石が 2 石確認され、また、北西と南東側にこの土が落ち込んでいくことがわかってきた。大きな石 2 石は平らなことや大きさから礎石の可能性が強いため、この地山ではない土は埋め戻した土ではなく、やはり、橋脚を設置する際に盛土した土の可能性が高くなった。盛土は調査区の堀底中央部を幅約 7m 程にわたって高くして、北西・南東側は急激に落ち込んでいる。また、堀底中央部は SX1 とした掘り込みがあり、その南東端に SV1 とした石垣が築かれている。SV1 は高さ 30cm で 2、もしくは、3 石積まれた石垣で、幅 1.8m ある。石には加工の痕跡は見られず、野面積みである。石の大きさは、最大で 23cm×13cm ほどであり、一人一人で運べるサイズとなっている。石材は、城周囲で採取可能な輝石安山岩である。裏込め石はなく、裏側の土はしまりがいい土である。今までの調査で検出されている城の時の石垣は、裏込め石がない場合でもある程度の土のしまりがあったが、この石垣は対照的な造り方である。石垣裏側の SX1 には、何本かサブトレンチを入れているが、年代を決定付ける遺物は全くなく、この石垣、及び SX1 の構築年代は不明である。SX1 は、盛土を切ったあとに、径 3～10cm 程度の大量の石と共にしまりがいい土で埋められている。石は SX1 底面に集中する傾向がある。また、底面は北西から SV1 に向かって、15cm 程下がっていく。

S1 は 80cm×60cm のサイズで、やや北西側に傾斜しているが、ほぼ平らな石である。基礎構造を確認するためにサブトレンチを入れたところ、この石を据えるための明瞭な掘り込みは認められていない。ただし、石下部には小さめの石があり、盛土しながら、石底面に栗石を入れている様子が推測された。

S2 は 75cm×60cm のサイズで、ほぼ平らな石である。基礎構造を確認するためサブトレンチを入れたところ、盛土を切る形の層が確認され、S1 とは異なり、盛土後に S2 を据えていることが推測された。ただし、栗石は確認されていない。

S3 は、55cm×45cm のサイズである。南東側への傾斜がかなりある。S3 上面にはローム土が混じったしまりの弱い土がかぶっていた。この土は周囲の盛土とはしまりが異なり、S3 が使われなくなった後に堆積した可能性も考えられる土である。この石の場合、S2 と同様に盛土を切って据えていることが推測された。栗石は少量確認されている。南東側への傾斜がかなりあるため、原位置のままであるかは検討が必要である。

斜面中には、表土と全く同じ土を含む攪乱が 11 箇所確認されているが、城の時期の柱穴は確認されていない。

盛土を断ち割ったトレンチでは、斜面下部で最大深さ 80cm の掘り込みが確認されている (SX2・SX3)。その性格は不明である。盛土下の遺構になる。盛土内では、1 度土を盛った後、さらに盛土している状況がセクションで認められた。盛土の構築過程差か時期差なのかは不明である。

以上をまとめると、S1・S2 はほぼ平らに据えていると共に石の大きさから、礎石になると判断した。その結果、盛土上に礎石が据えられていることから、この盛土は埋め戻し土ではなく、礎石を据えるための盛土であると判断している。また、S3 については、石の大きさから礎石の可能性も高いが、傾斜がきつく原位置にあるかは慎重な検討が必要である。S1 と S2 間は芯々距離で 6.7m、S1 と S3 間は 3.8m である。S1 と S3 が対応する可能性があるが、S2 の南側に対応する石はサブトレンチなどで、抜き取り痕を含めて確認するように努めたが、全く確認されなかった。完全に流されたり、抜かれたりしてしまったのであろうか。また、斜面部についても礎石は確認されなかった。斜面に段を設けてその段に礎石を据える可能性なども当然考慮しなければならないが、そうした段も検出されていない。斜面部については礎石が据えられなかったか、あったとしても完全に崩れたり、抜かれたりした可能性も一応考慮しておく。SX1 については、SV1 方向へ底面が傾斜しており、橋脚部の水抜き用の掘り込みという意見を保存整備委員会で頂いている。そうした可能性があることをここでは指摘しておく。盛土の厚さについては、斜面部では、厚さ 1m 程度であるが、堀底部については、深くなり危険であったため、

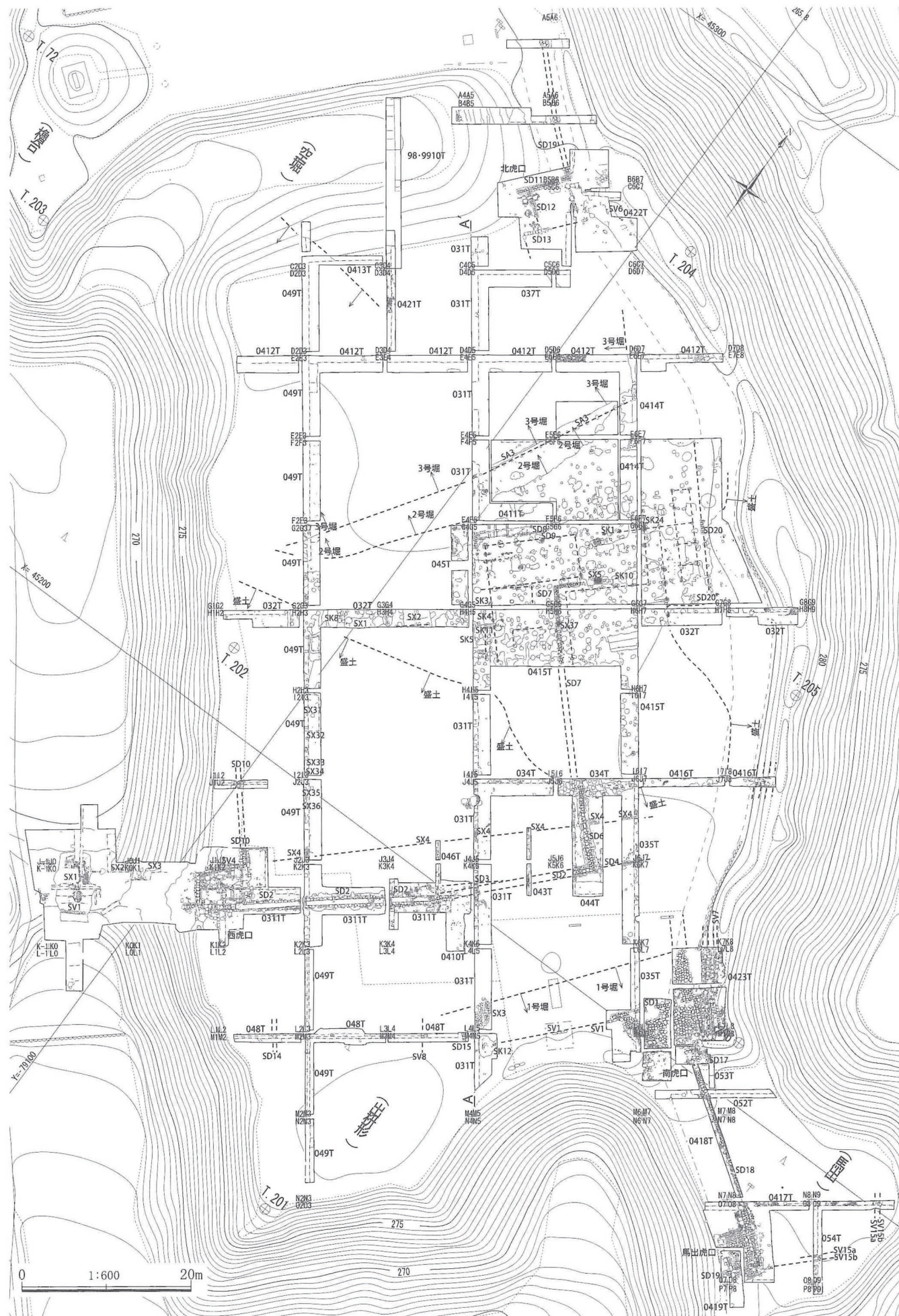
厚さの確認は全くできていない。本丸西虎口の幅は 2.87m で S1・S3 の間隔とは異なる。S3 の評価は難しいが、この石が原位置であると仮定した場合、橋脚は礎石部を広くし、橋上部で門の幅と同じようにするためにやや斜めに据えられた可能性がある。本丸西虎口の門と S1・S2 の軸が異なっている。西虎口の排水溝は、溝の堀側末端が残っていないため、水をどのように堀に落としていたかは不明である。斜面部に馬の背状に伸びる尾根状部分が排水溝の延長線上に位置している。この尾根状部分によって水が橋脚部に行かないのは確実であり、こうした排水処理との関係で軸が異なっている可能性もあげられるが、今後の検討課題である。なお、蔵屋敷と本丸西虎口のレベル差が 2m あり、橋自体にレベル差があるのか、西虎口から少しスロープ状において、同じレベルの場所から橋がかかるのかは調査ではわからず、今後の課題である。なお、蔵屋敷のレベルで橋の高さを推測してみると、高さ 7.4m の橋脚だったことが推測できる。

(3) 出土遺物 (第 205～246 図)

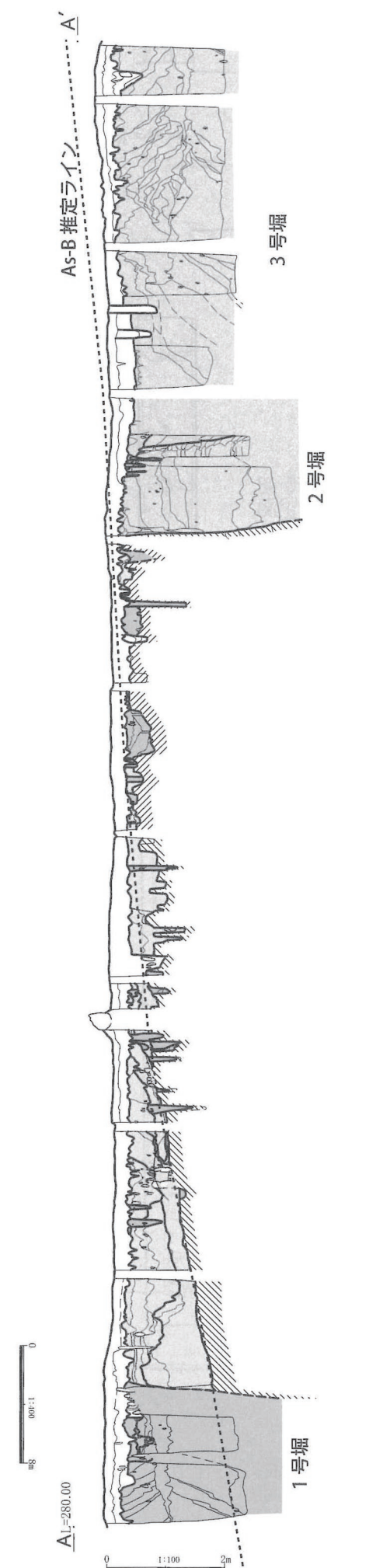
他の曲輪と比較して、全般的に出土量は多い。平成 15 年度調査分だけのデーターになるが、土器・陶磁器の総量は 1,496 点で、㎡あたり 2.075 点出土しているのに対し、同じ年度に調査した木俣地区では、346 点出土し、㎡あたり 0.600 点の出土である。また、かわらけの出土量も多く、これも平成 15 年度分だけのデーターであるが、土器・陶磁器の中で約 90 パーセントの比率を占め、木俣地区の約 60 パーセントと異なっている (箕郷町教委 2005)。他の年度分を合わせても、こうした比率は大差ないと思われるが、今後、何らかの形で公表したい。

この曲輪で特徴的なのは、手づくねかわらけ (306～311) が出土したことである。胎土・特徴から小田原のものと完全に一致しており、小田原から持ち込まれている可能性が高い。本丸のみの出土で、その儀礼的意味などを考える上で貴重な資料になるだろう。

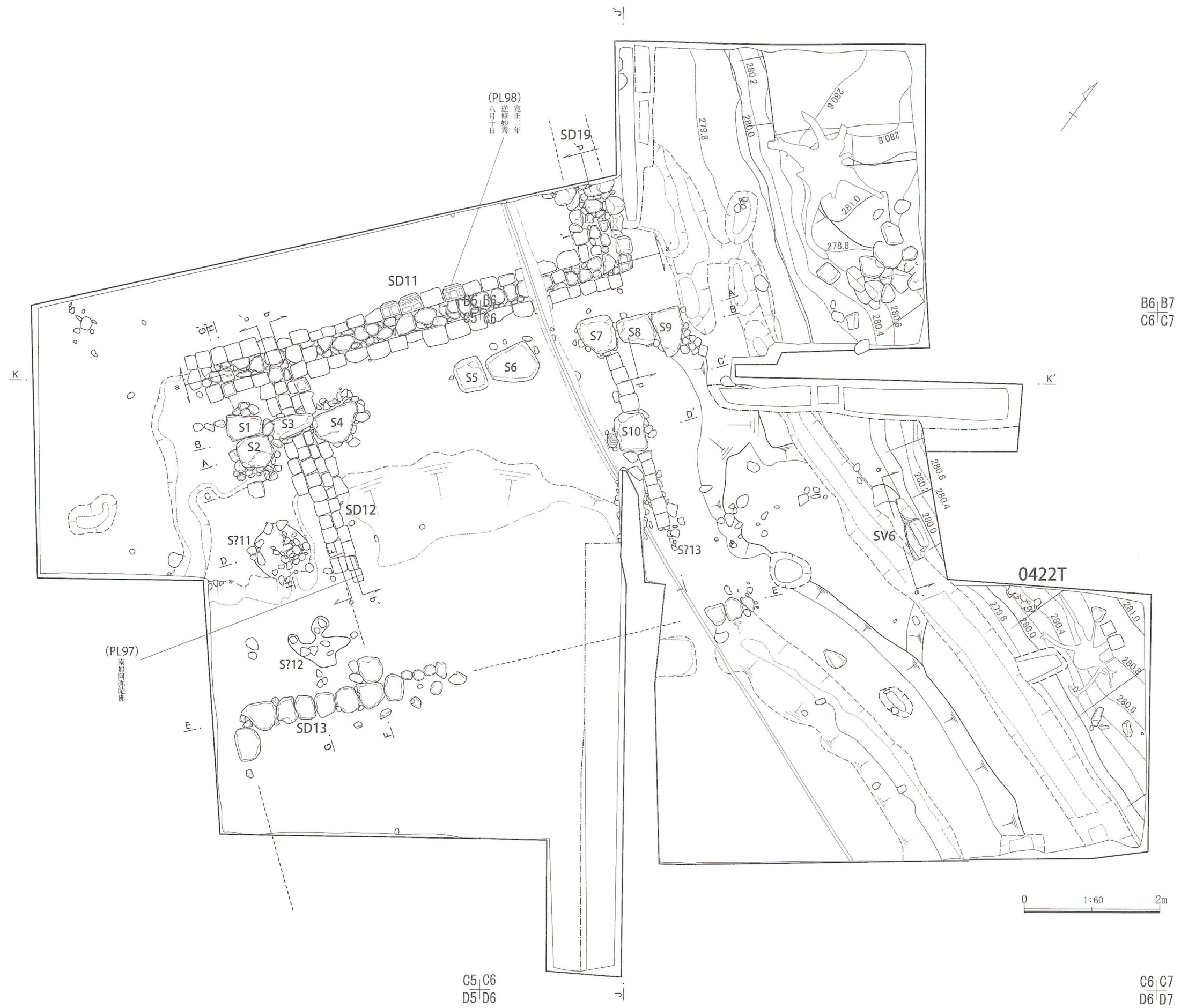
他に本丸の出土遺物で特徴的なのは、石塔の出土量が他の曲輪に比べて多かったことである。そのほとんどが、各虎口の石垣崩落層中からの出土で、虎口周囲の石垣に使われていたものになるだろう。各虎口とも検出された石垣や排水溝に石塔が多く用いられていた (総量は 173 個) が、崩落層中などから出土し取り上げた 129 個をプラスすると、総数量 302 個に上る。これらのうち 3 点が牛伏砂岩であったが、他は箕輪城周辺で採取可能な角閃石安山岩、及び輝石安山岩 (黒色安山岩) であった。牛伏砂岩製の 3 点出土したことは注意が必要であるが、基本的には、箕輪城周辺の石塔を集めたものといえよう。紀年銘がある石塔の最新年号は 743 の天文 22 年 (1553) であった。



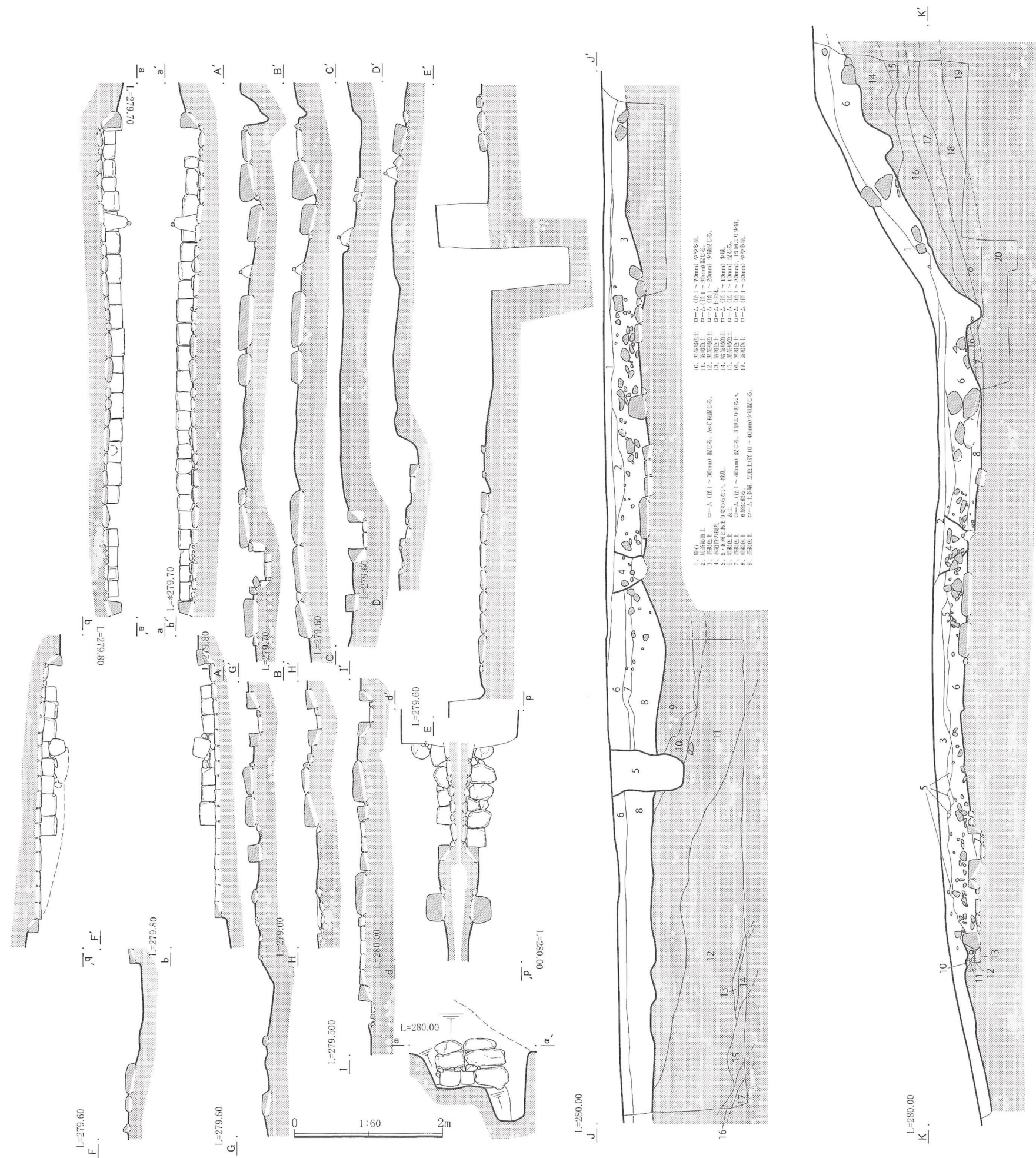
第 144 図 本丸地区全体図



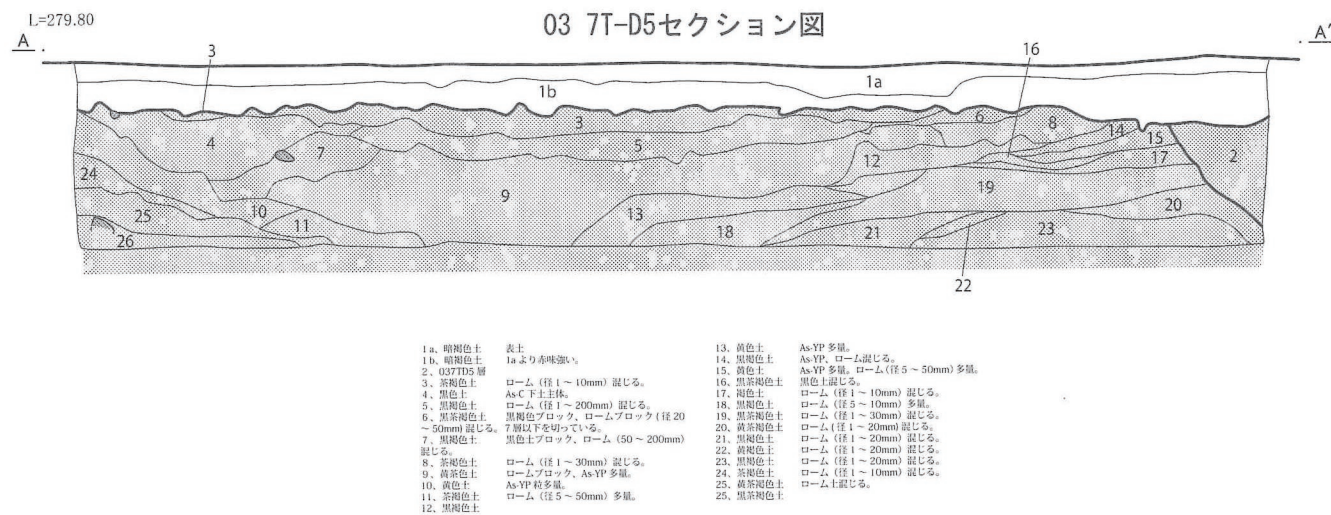
第 145 図 本丸地区模式セクション図



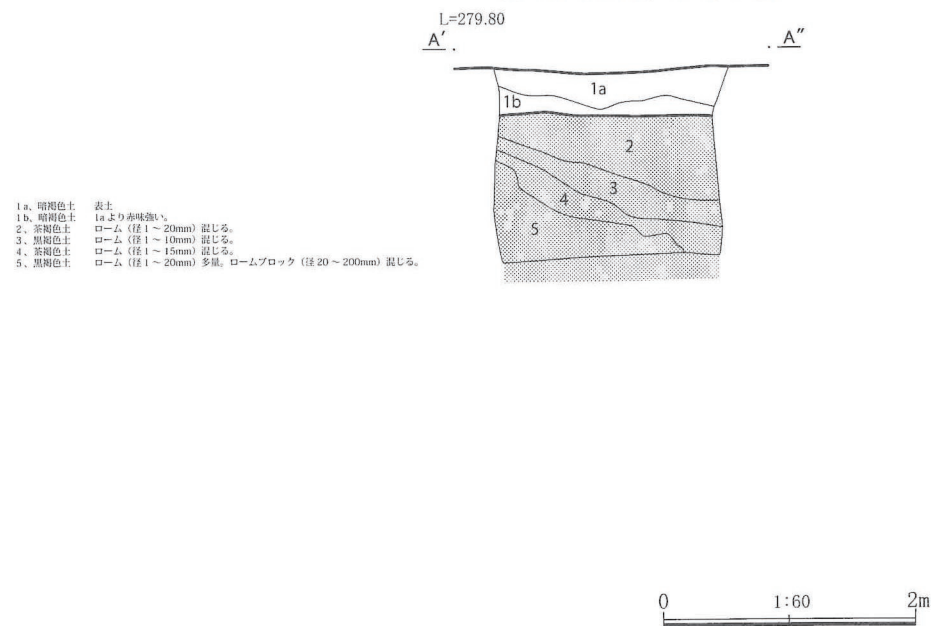
第 147 図 本丸地区 B5・B6・C5・C6 グリット本丸北虎口（平面図）



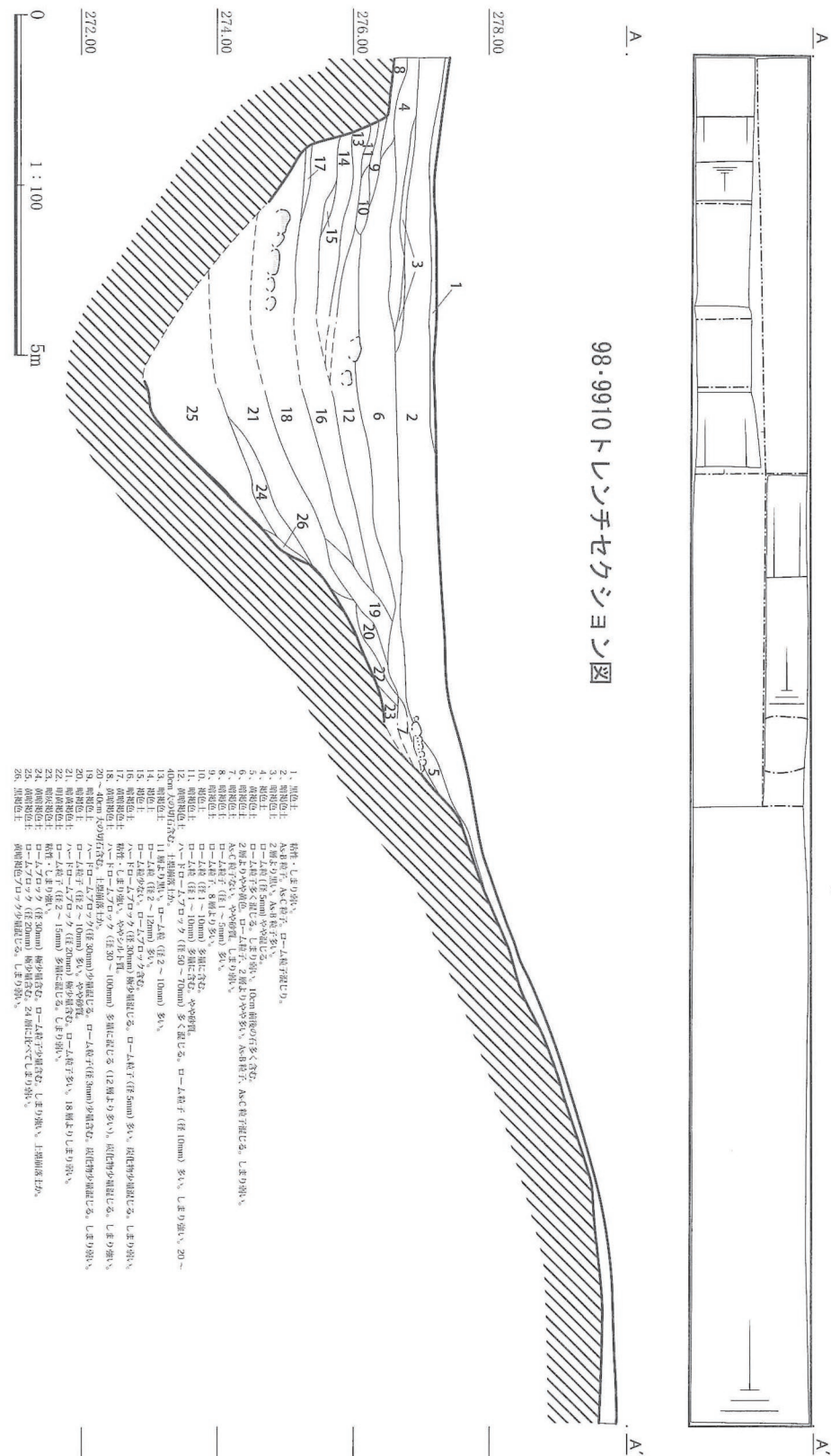
第 149 図 本丸地区 C5・D5・D6 グリット 031T・037T (平面図・セクション図)



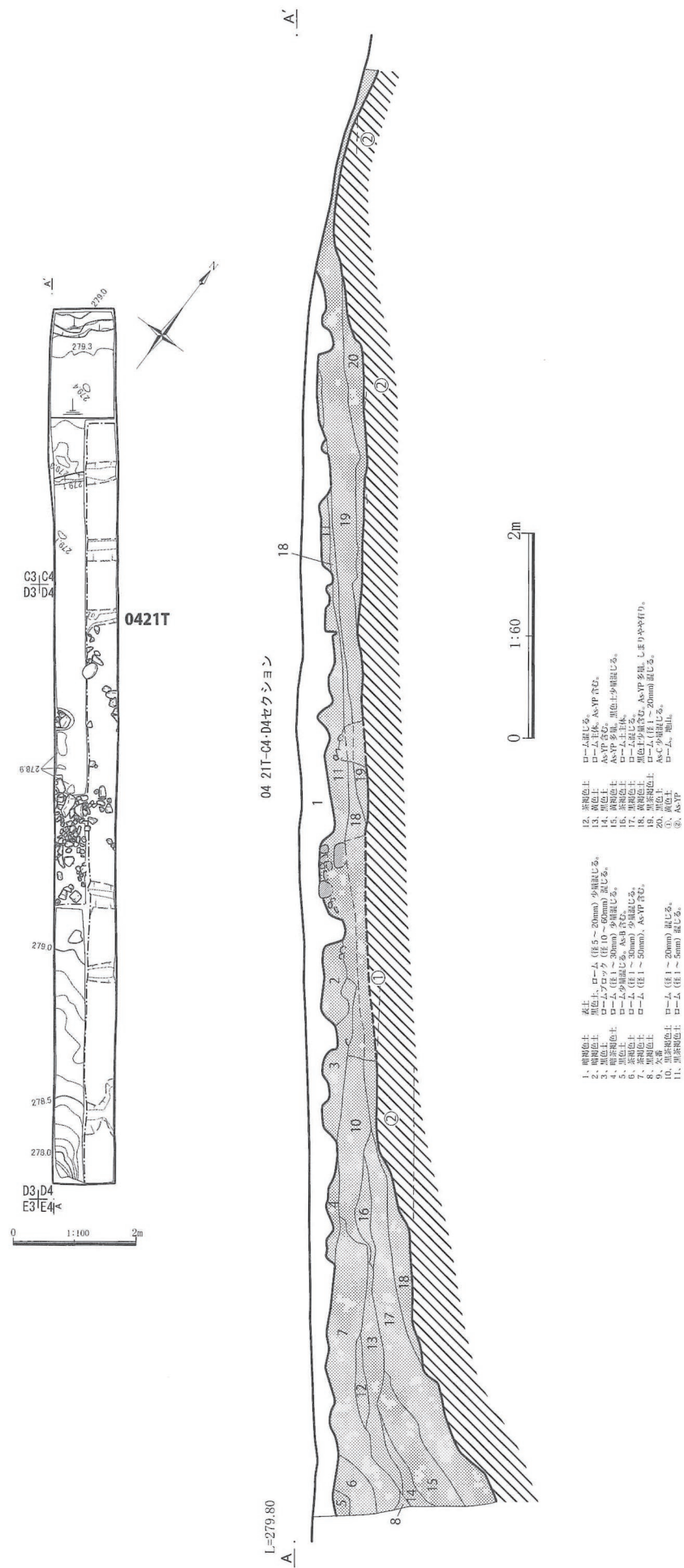
03 7T-D6セクション図



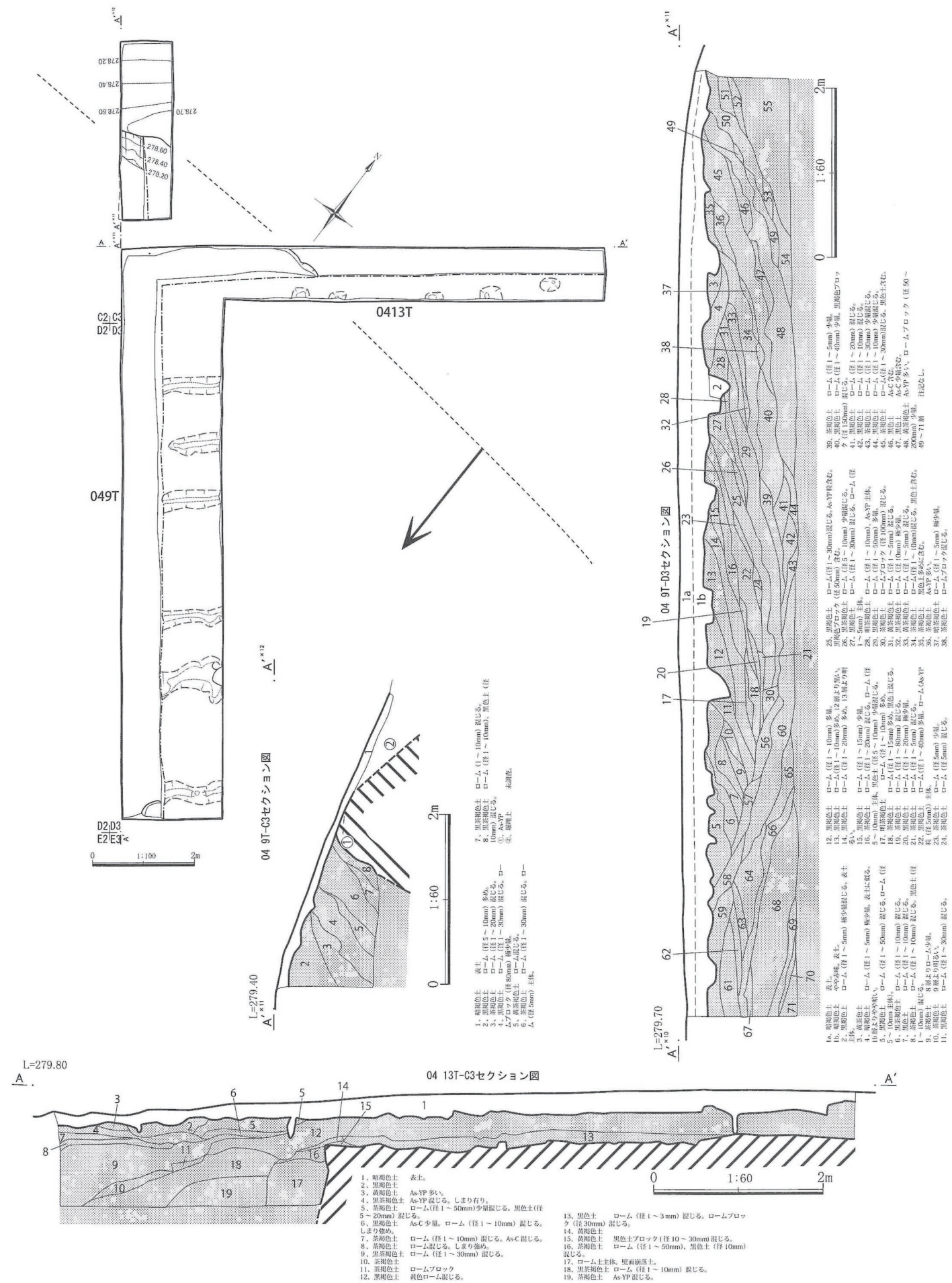
第150図 本丸地区D5・D6グリット037T (セクション図)



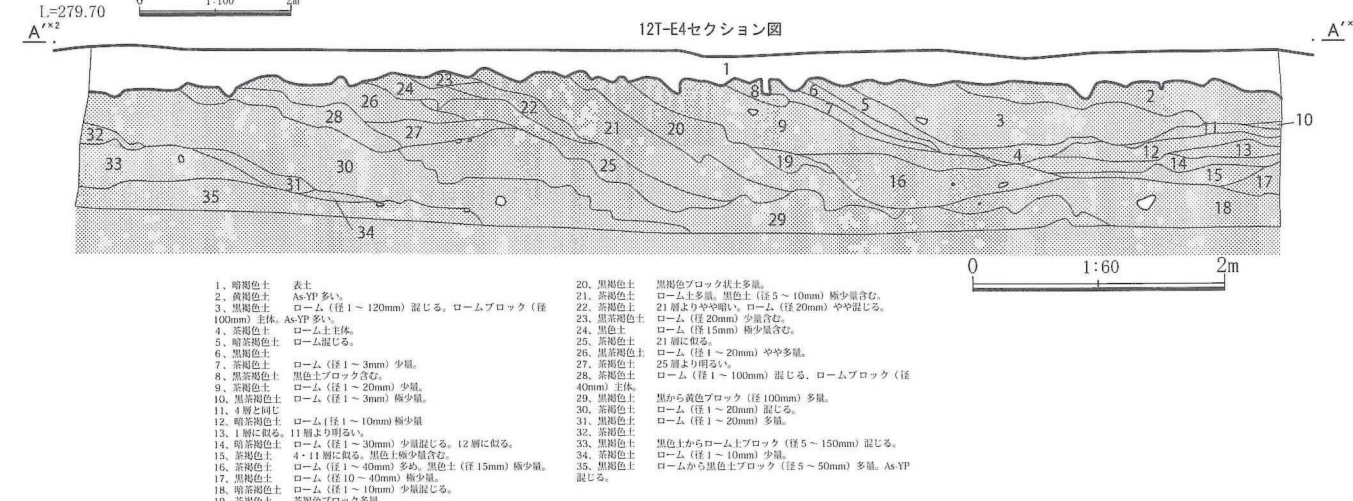
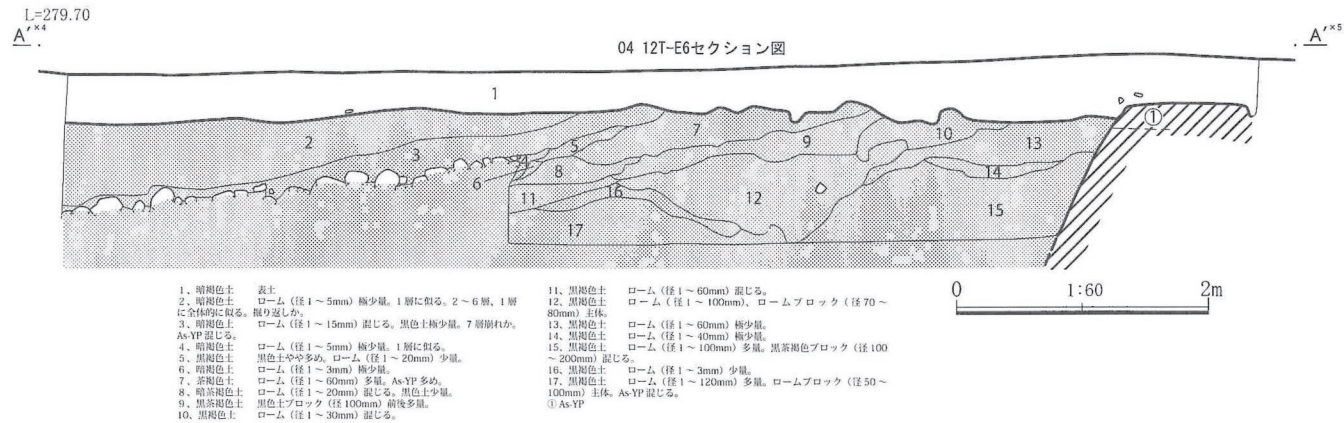
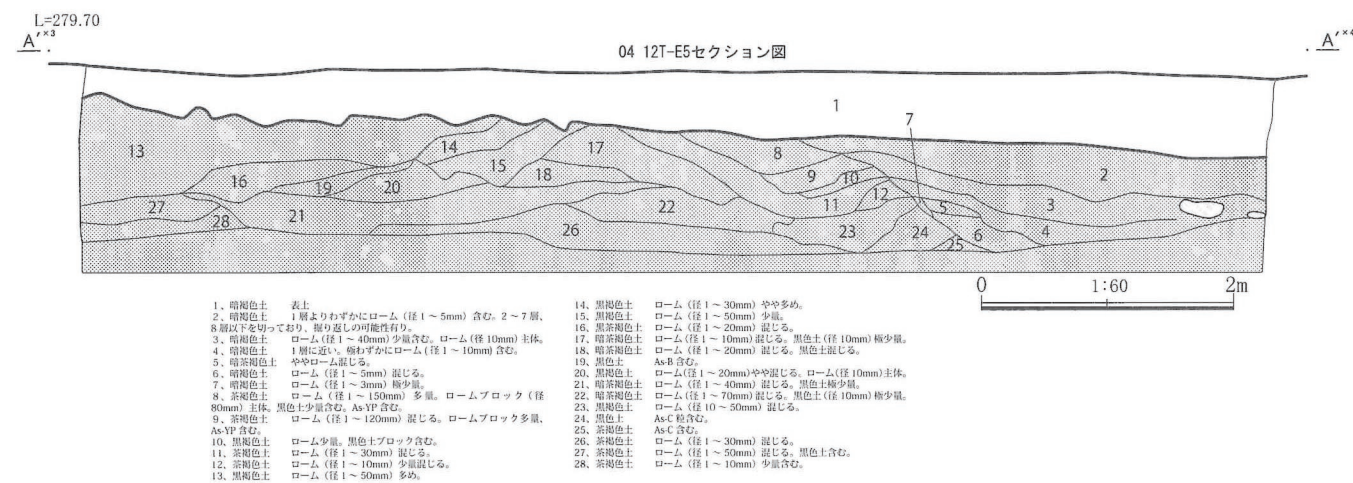
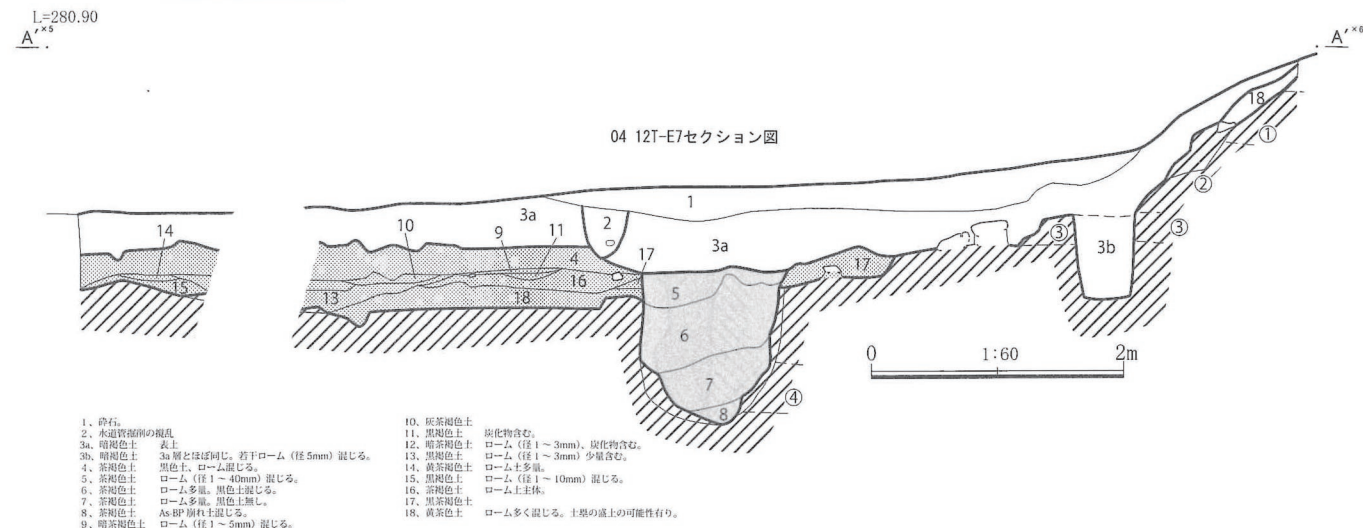
第151図 本丸地区B4・C4グリット98・9910T (平面図・セクション図)



第 152 図 本丸地区 C4・D4 グリット 0421T (平面図・セクション図)

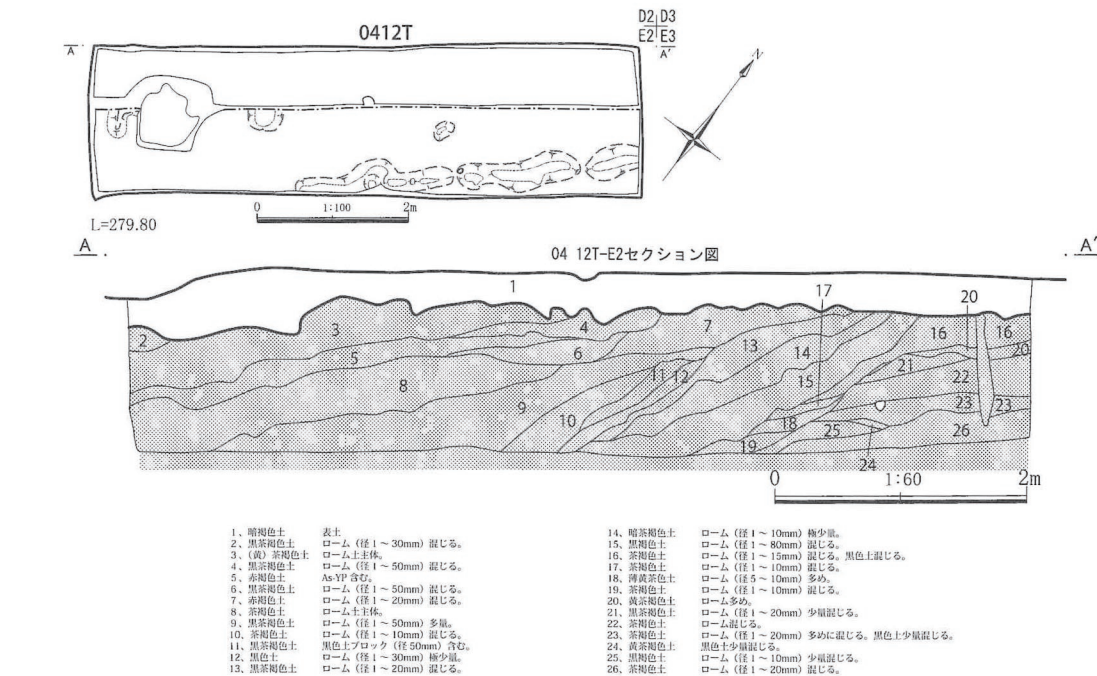
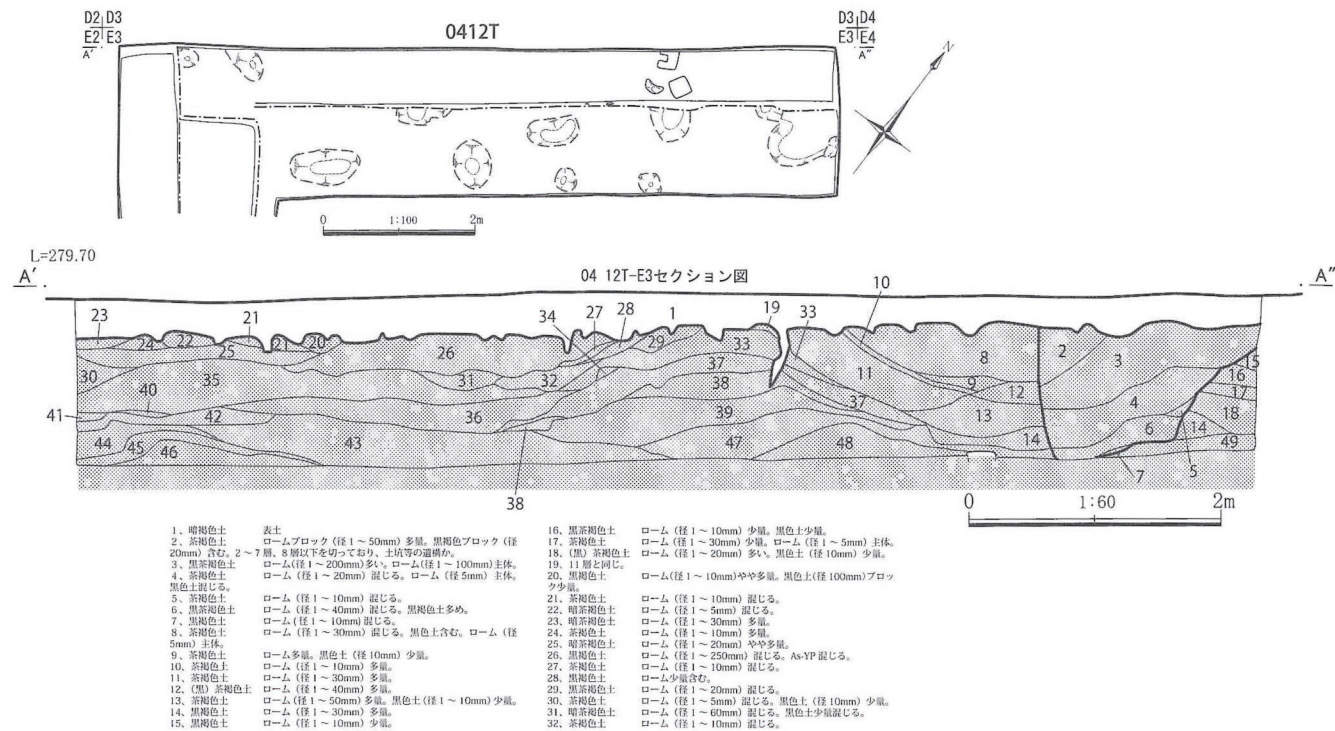


第 153 図 本丸地区 C3・D3 グリット 049T・0413T (平面図・セクション図)

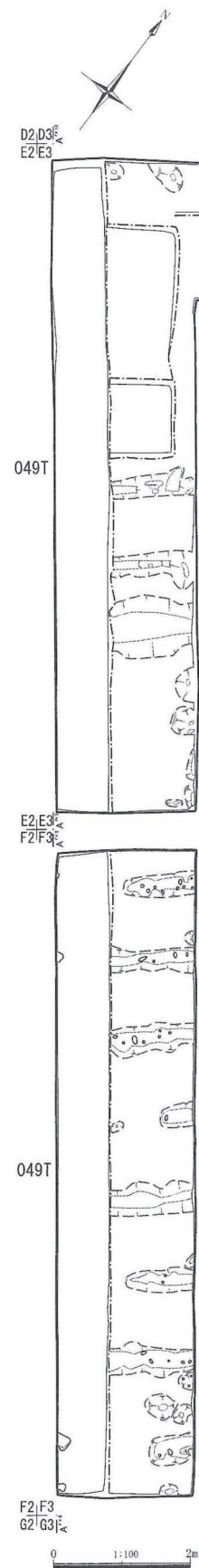


第 154 図 本丸地区 E6・E7 グリット 0412T (平面図・セクション図)

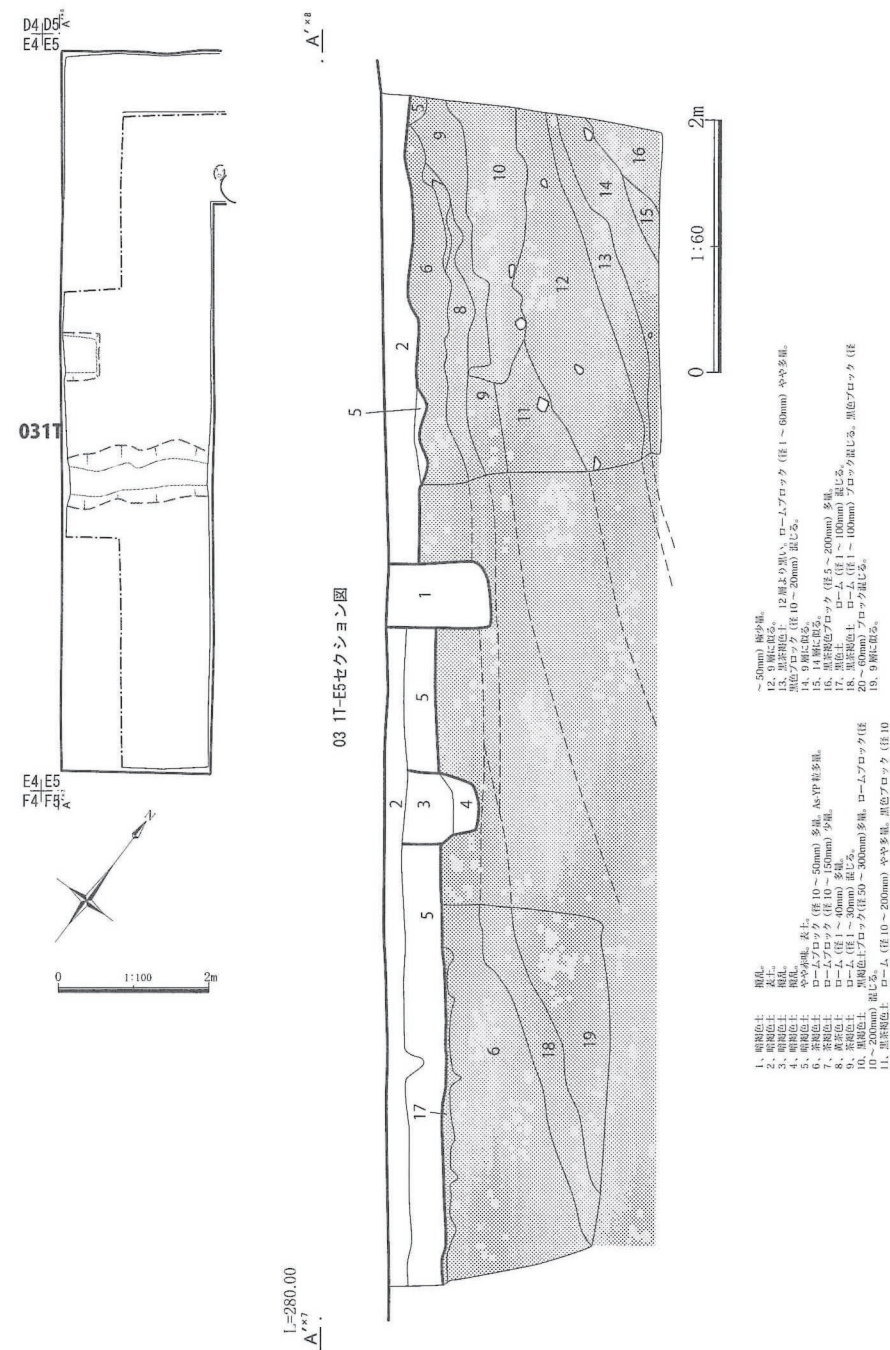
第 155 図 本丸地区 E4・E5 グリット 0412T (平面図・セクション図)



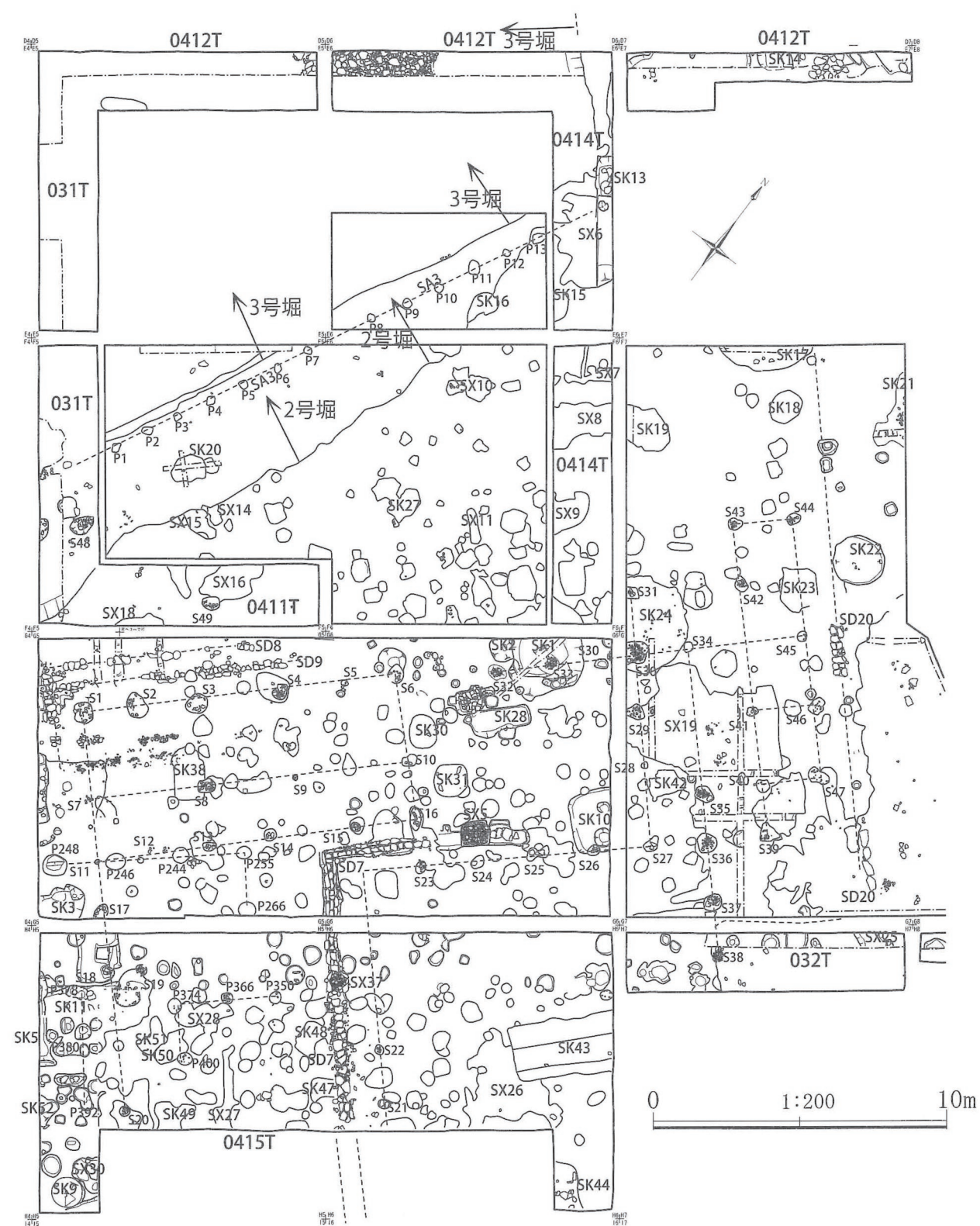
第156図 本丸地区E2・E3グリット0412T(平面図・セクション図)



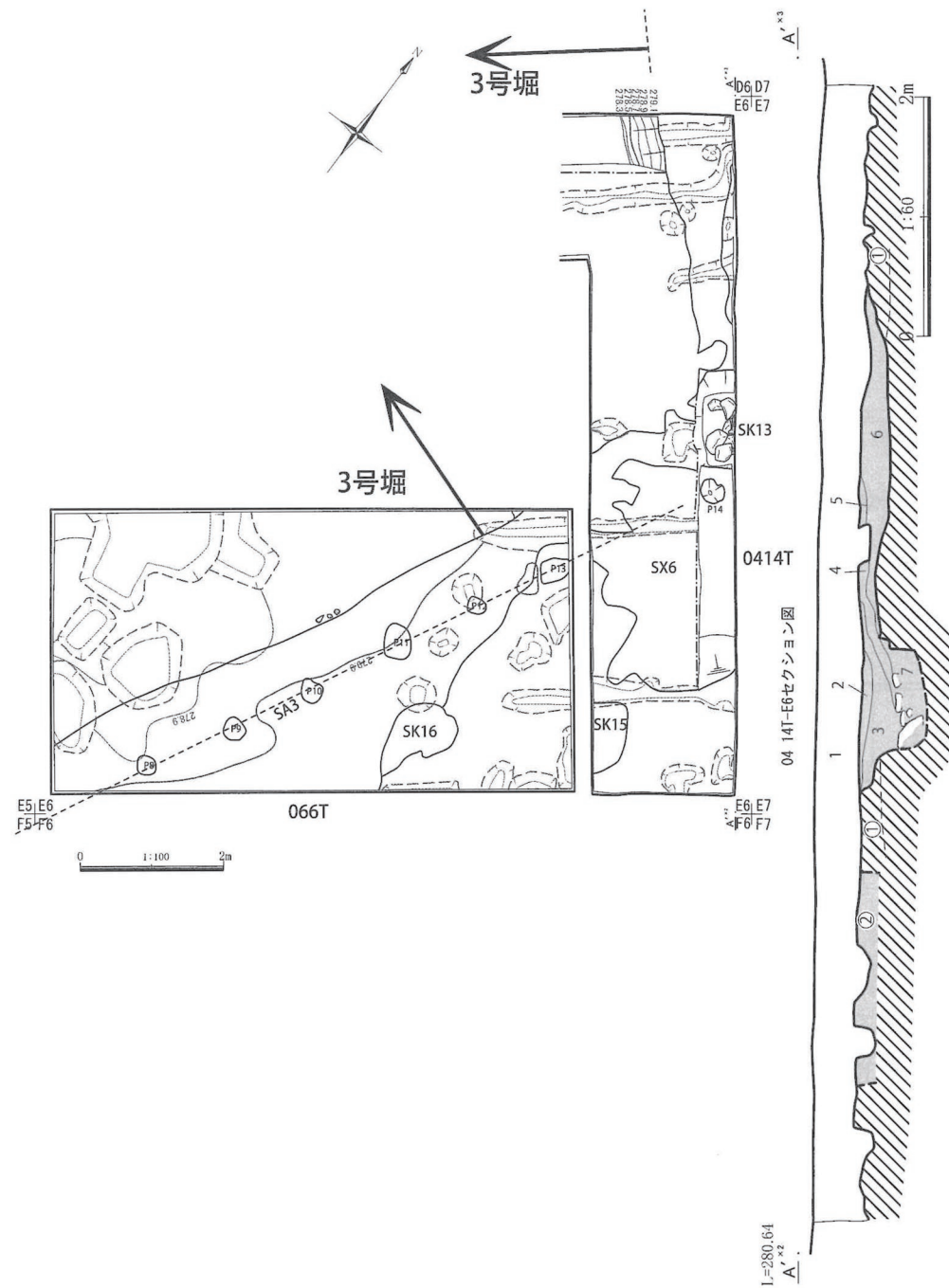
第157図 本丸地区E3・F3グリット049T(平面図・セクション図)



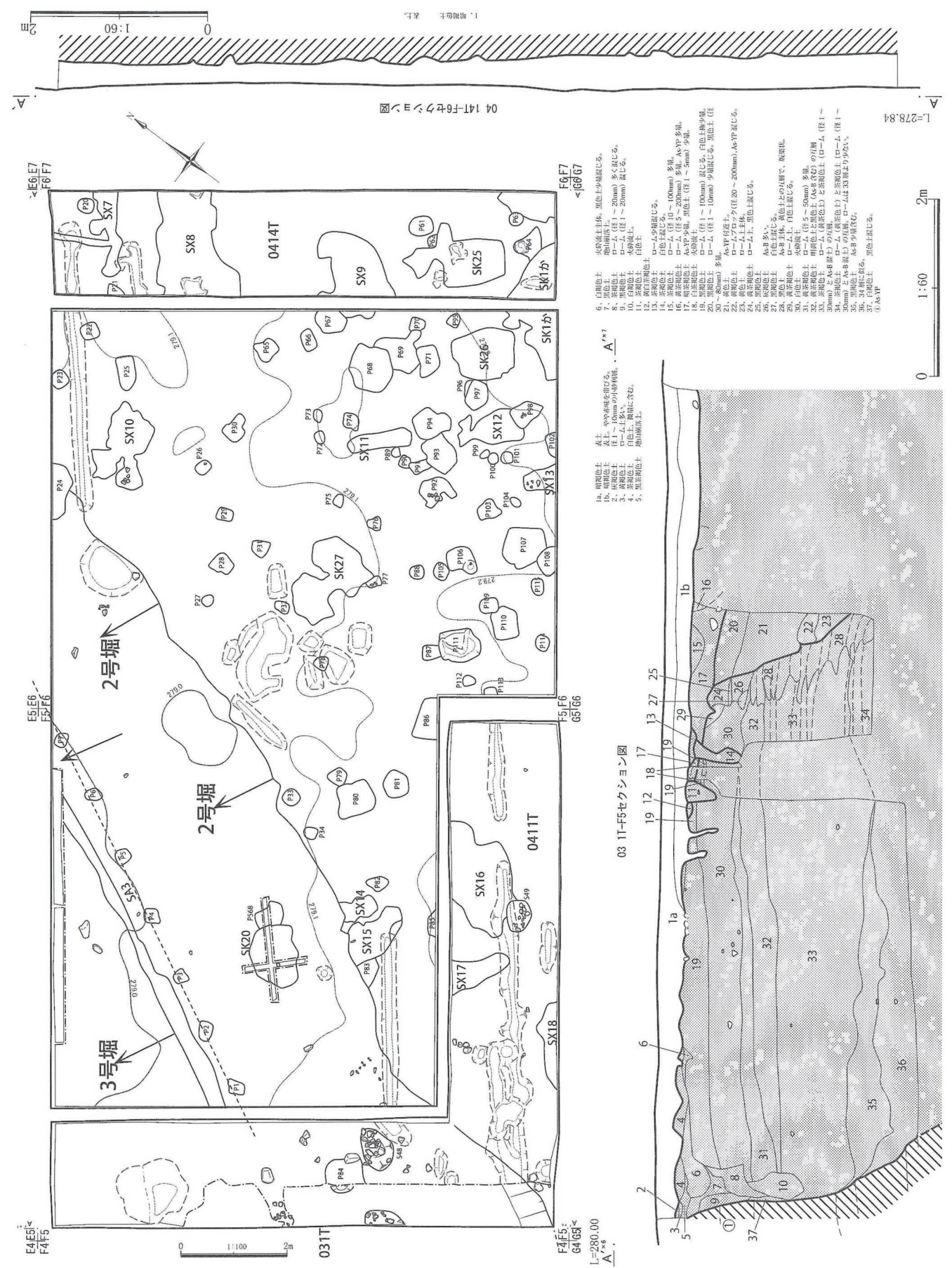
第 158 図 本丸地区 E5 グリット 031T (平面図・セクション図)



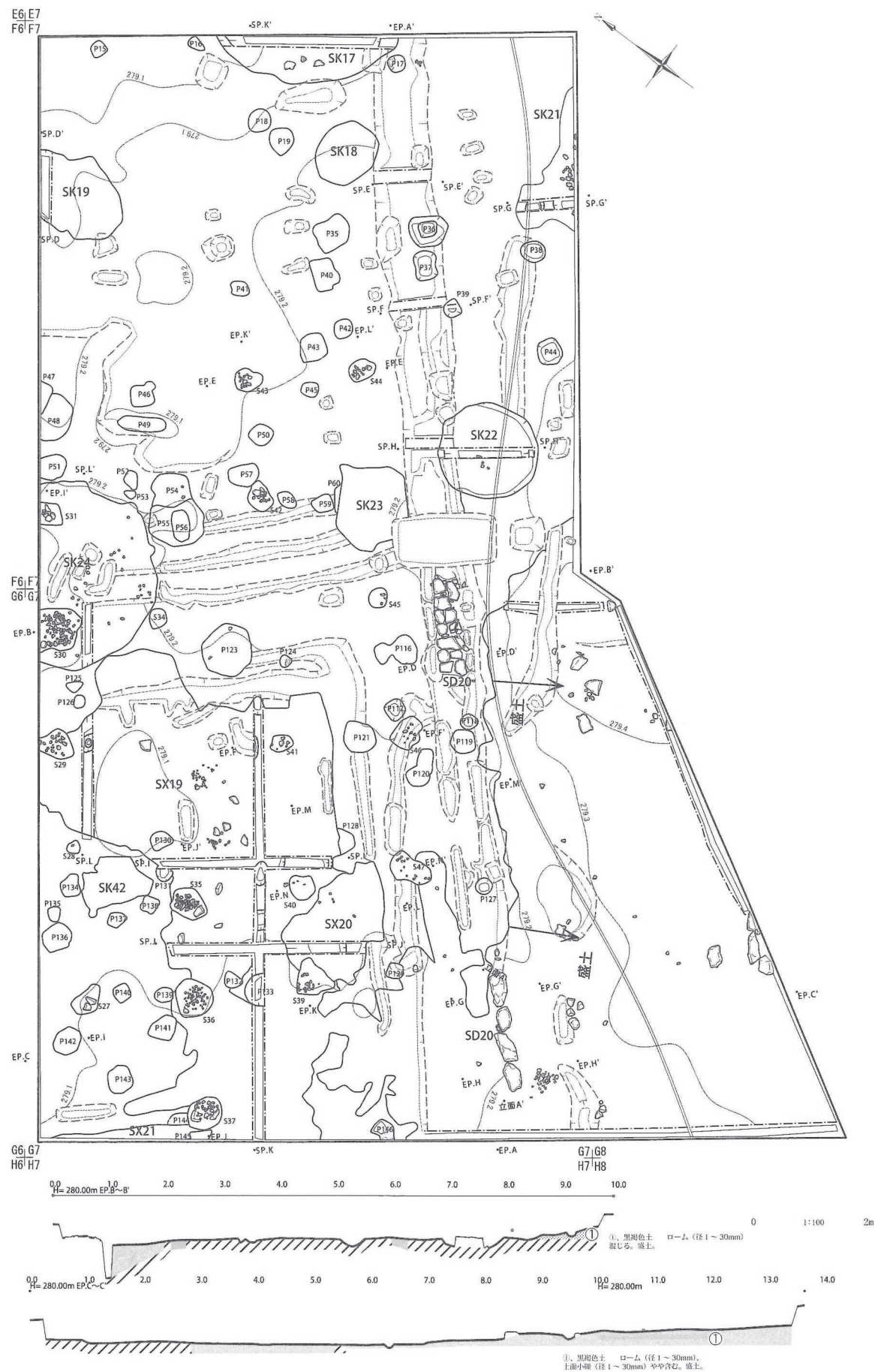
第 159 図 本丸地区 E5 ~ E7・F5 ~ F7・G5 ~ G7・H5 ~ H7 グリット本丸中央部 (平面図)



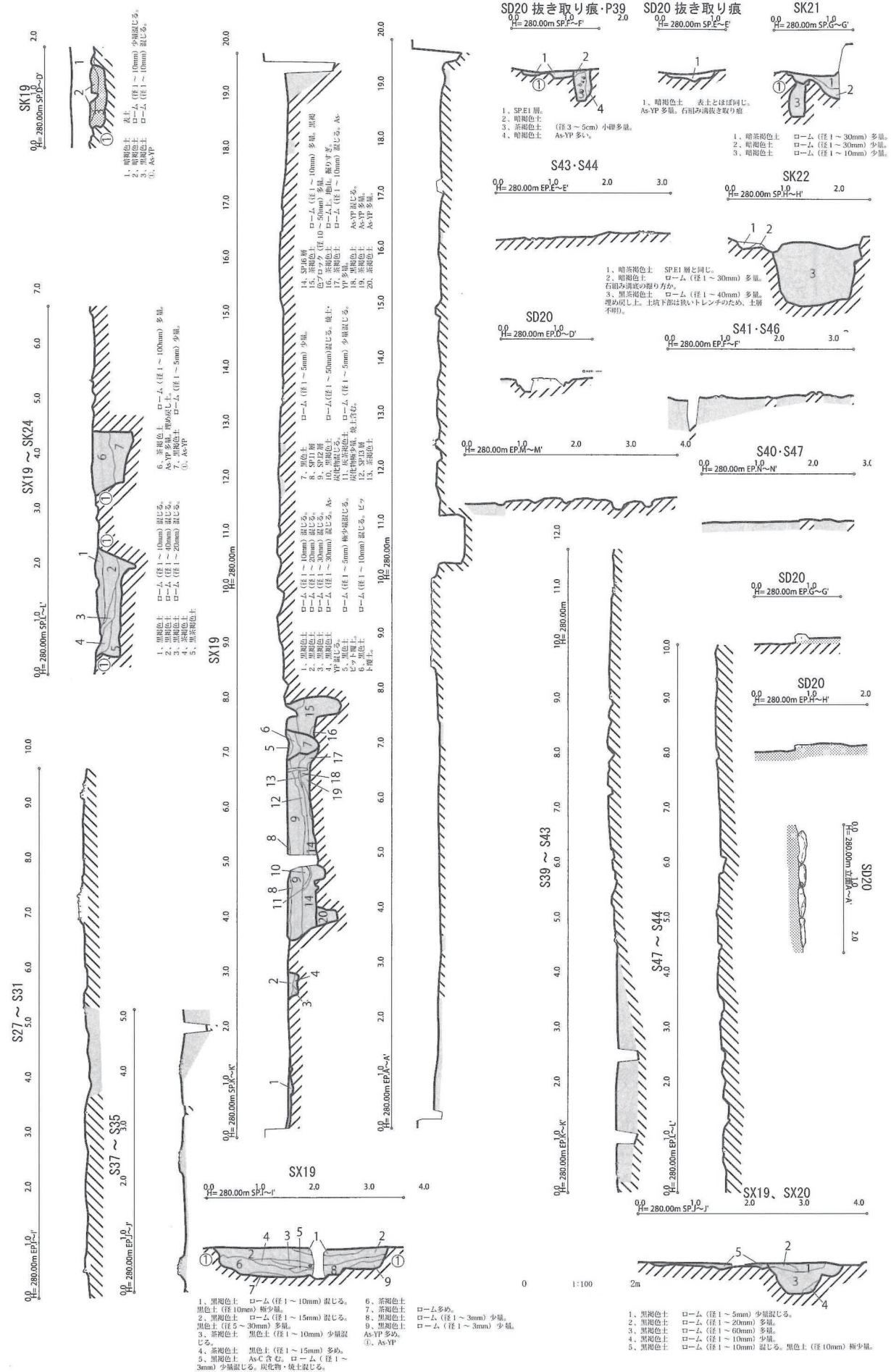
第 160 図 本丸地区 E5・E6 グリット 0414T・066T (平面図・セクション図)



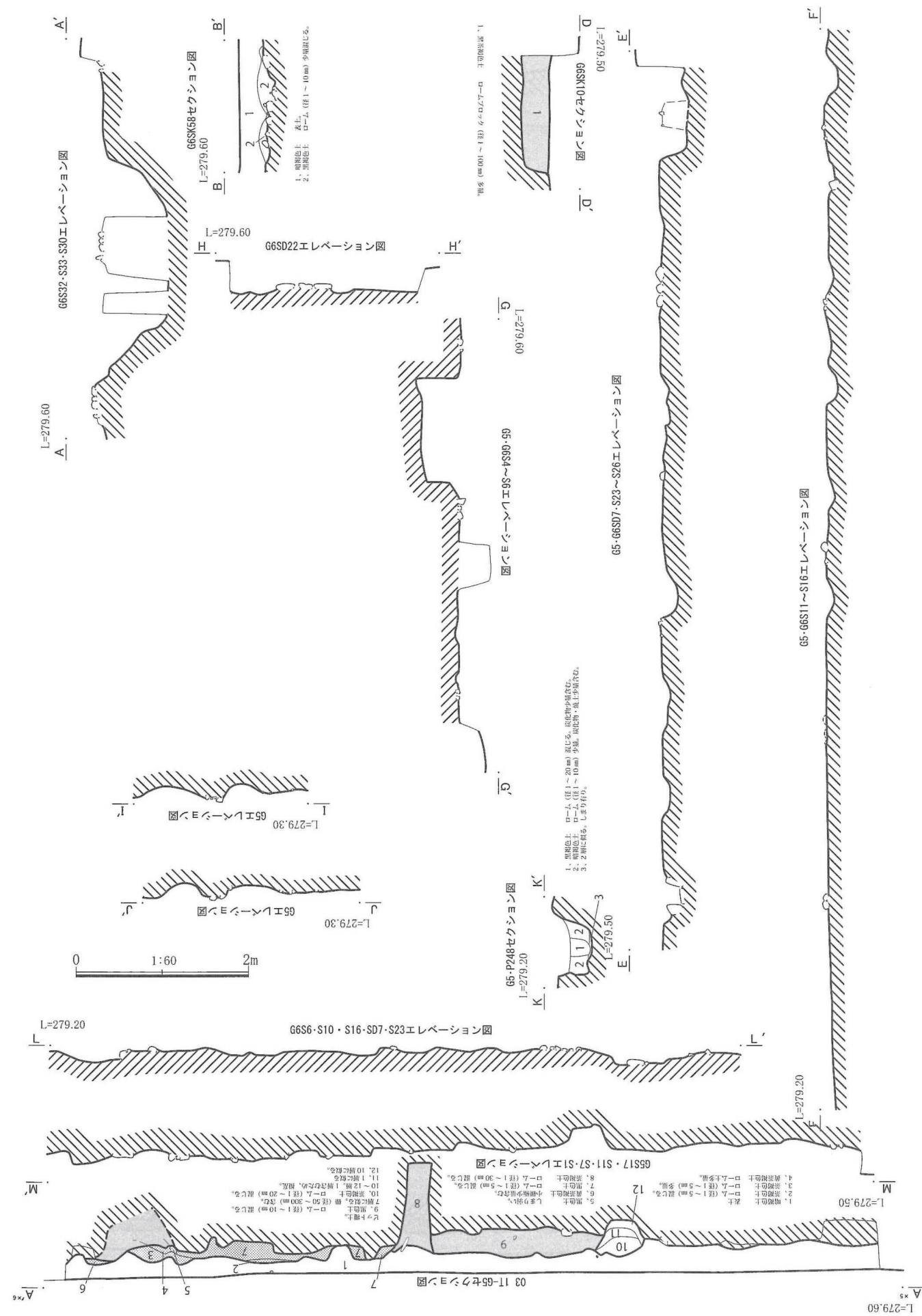
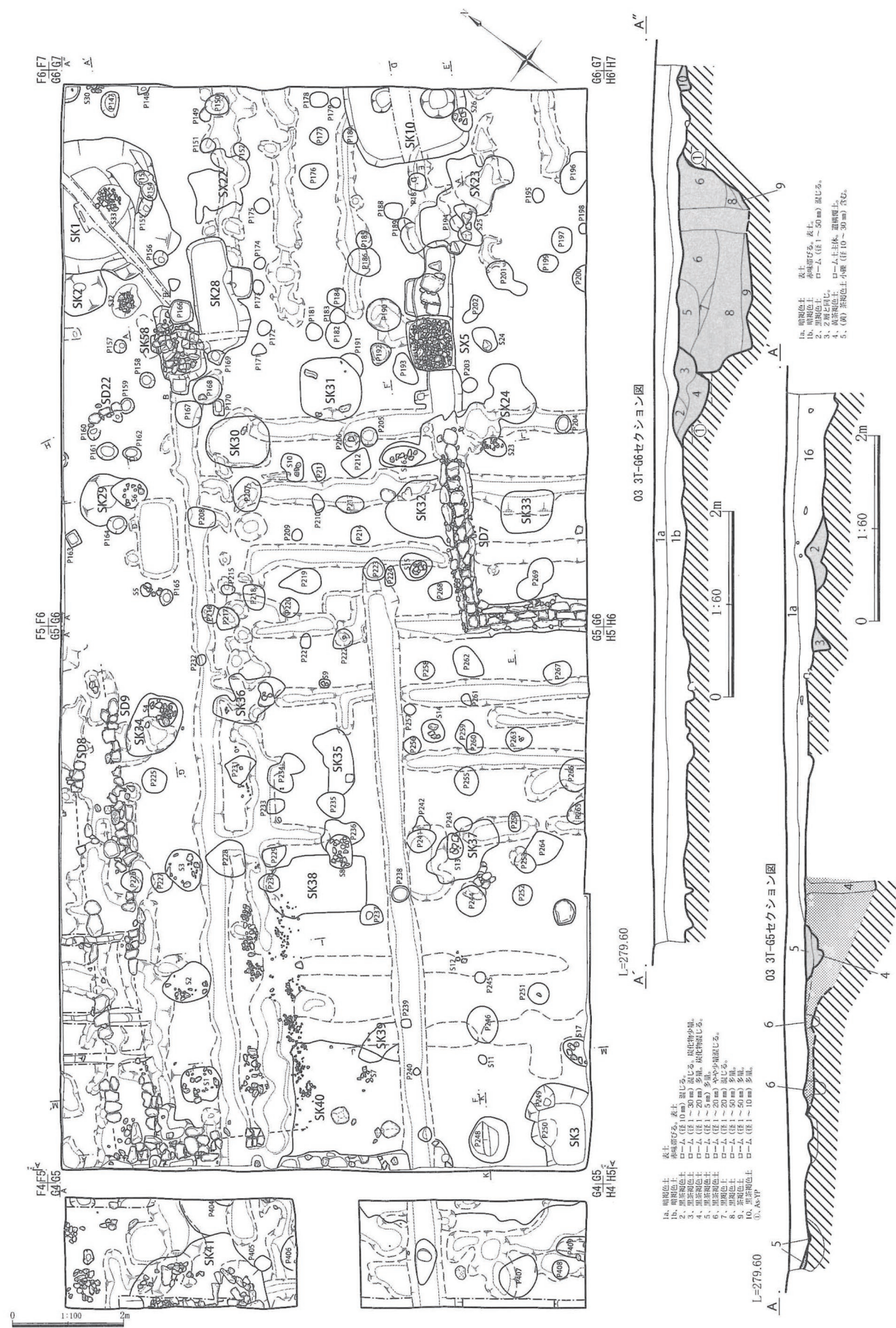
第 161 図 本丸地区 F5・F6 グリット 031T・0411T・0414T・062T (平面図・セクション図)

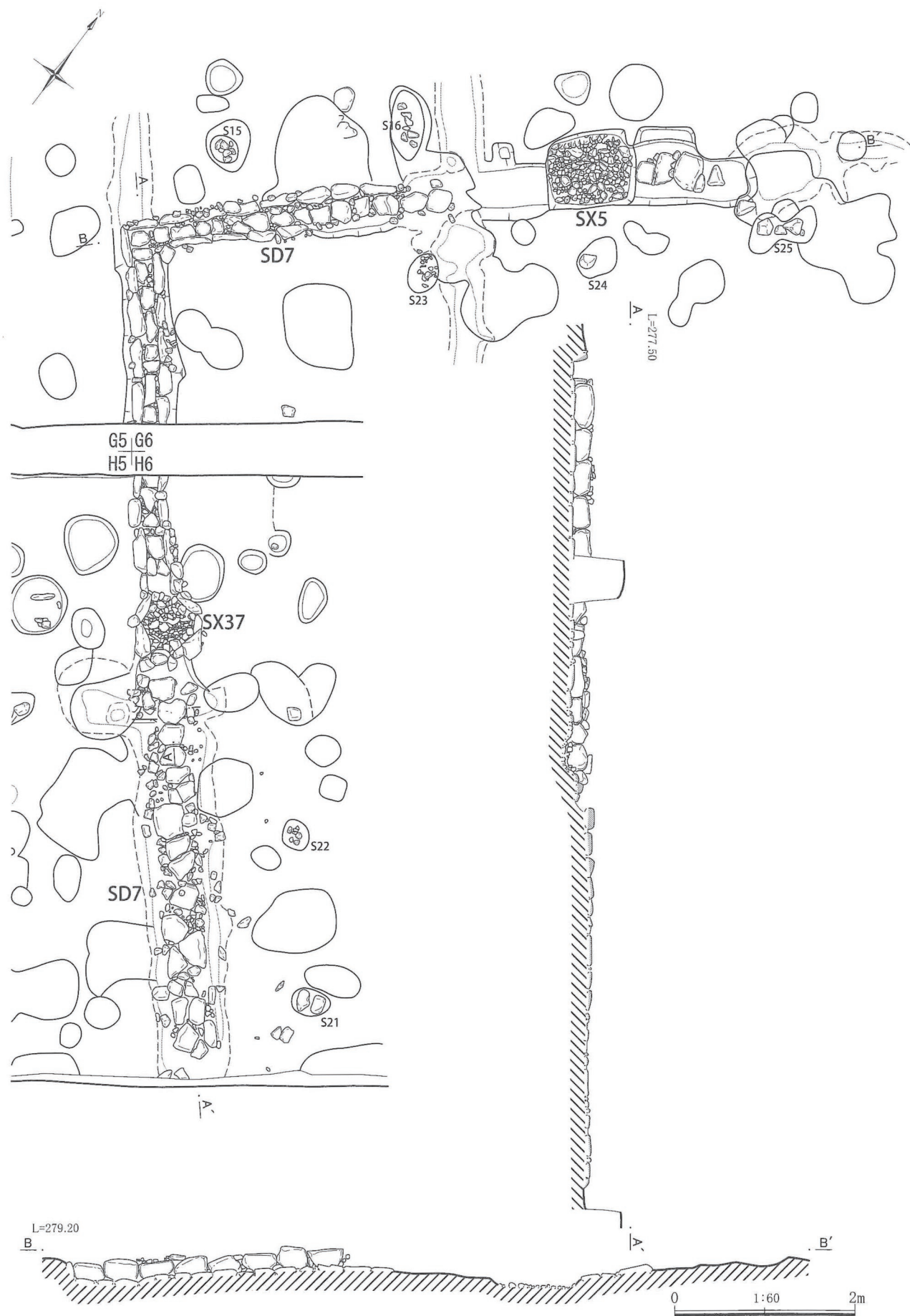


第162図 本丸地区F7・G7グリット（平面図・エレベーション図①）

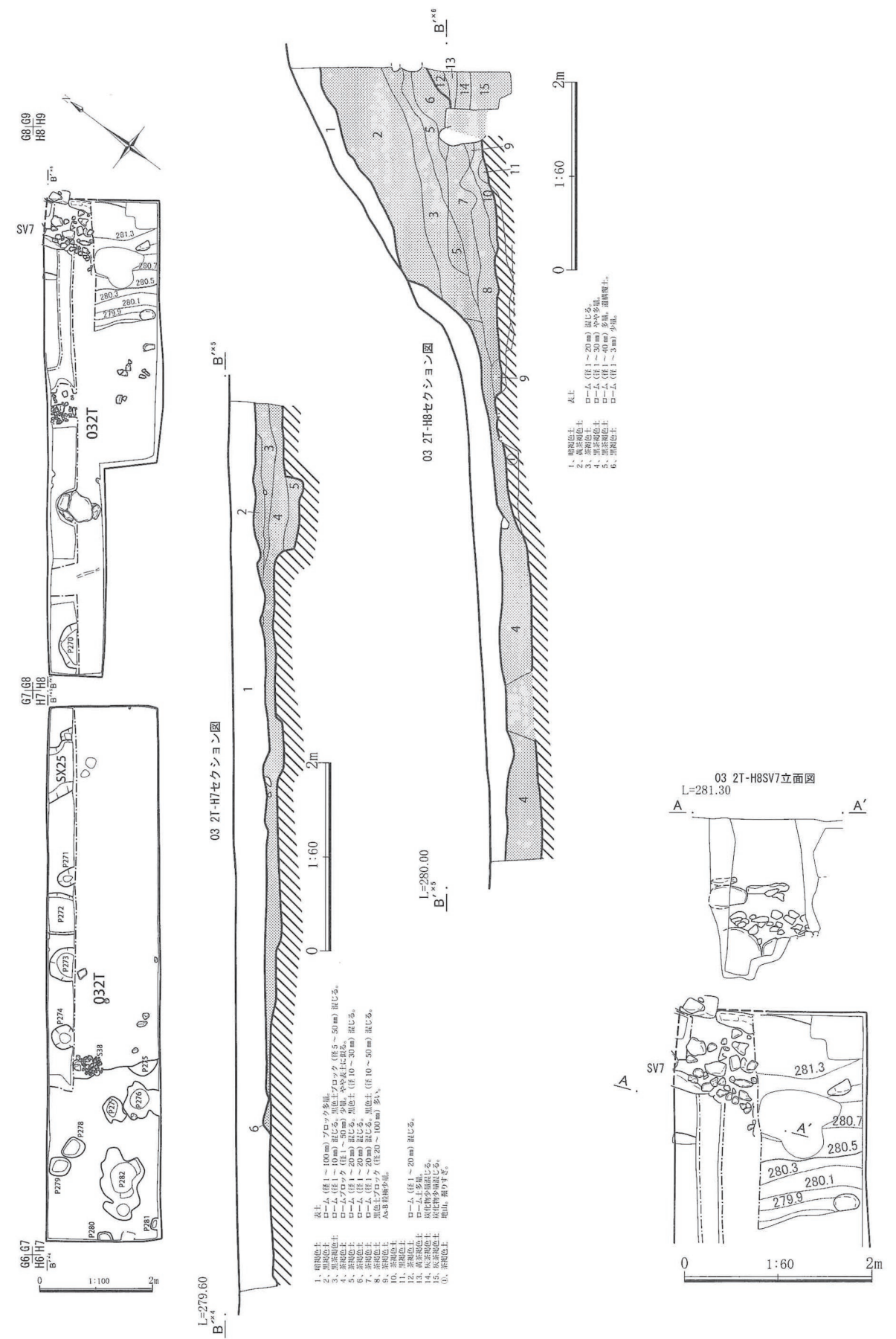


第163図 本丸地区F7・G7グリット（セクション図・エレベーション図②）

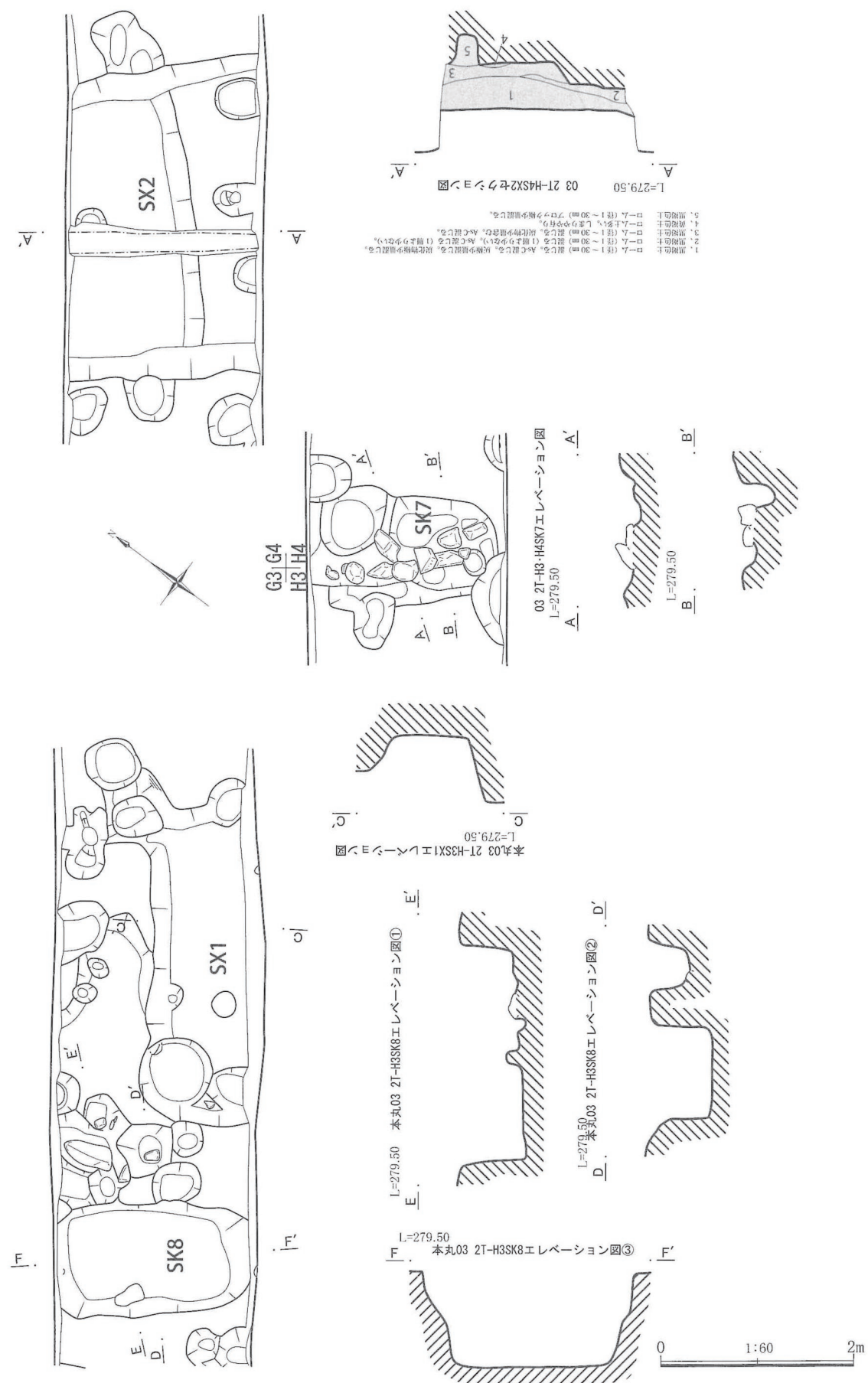
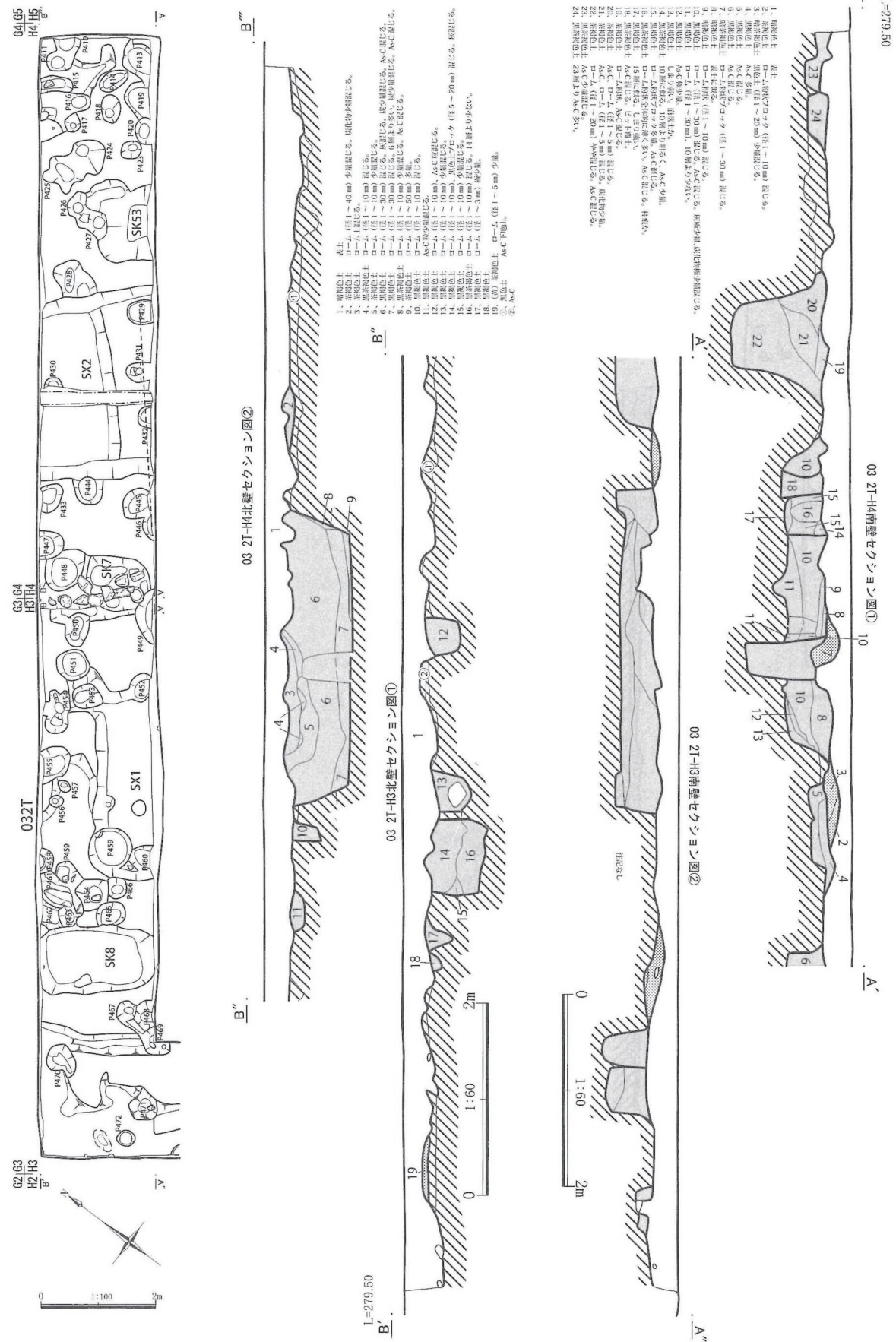


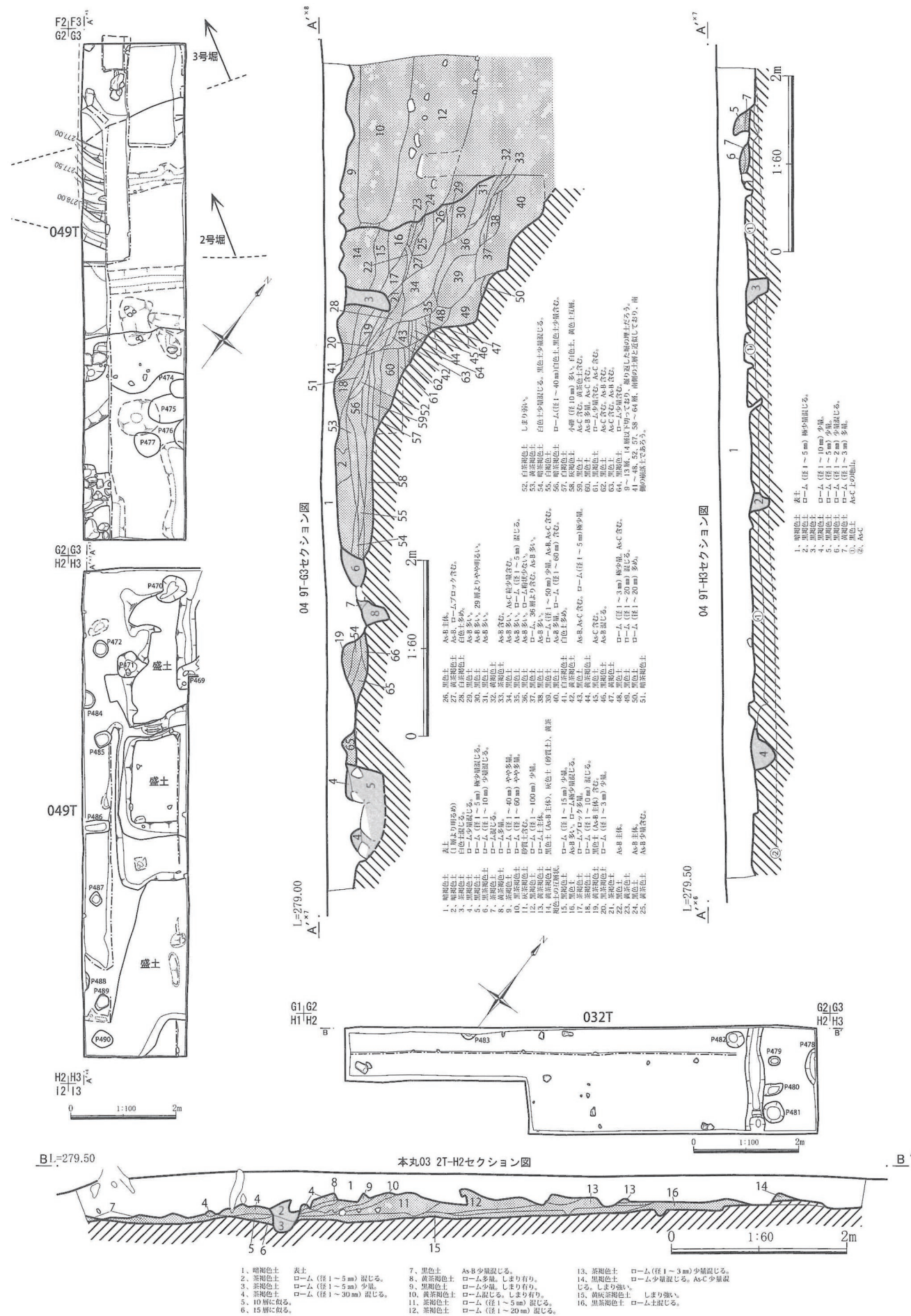


第 168 図 本丸地区 G5・G6・H5・H6 グリット SX5・SD7・SX37(平面図・立面図)

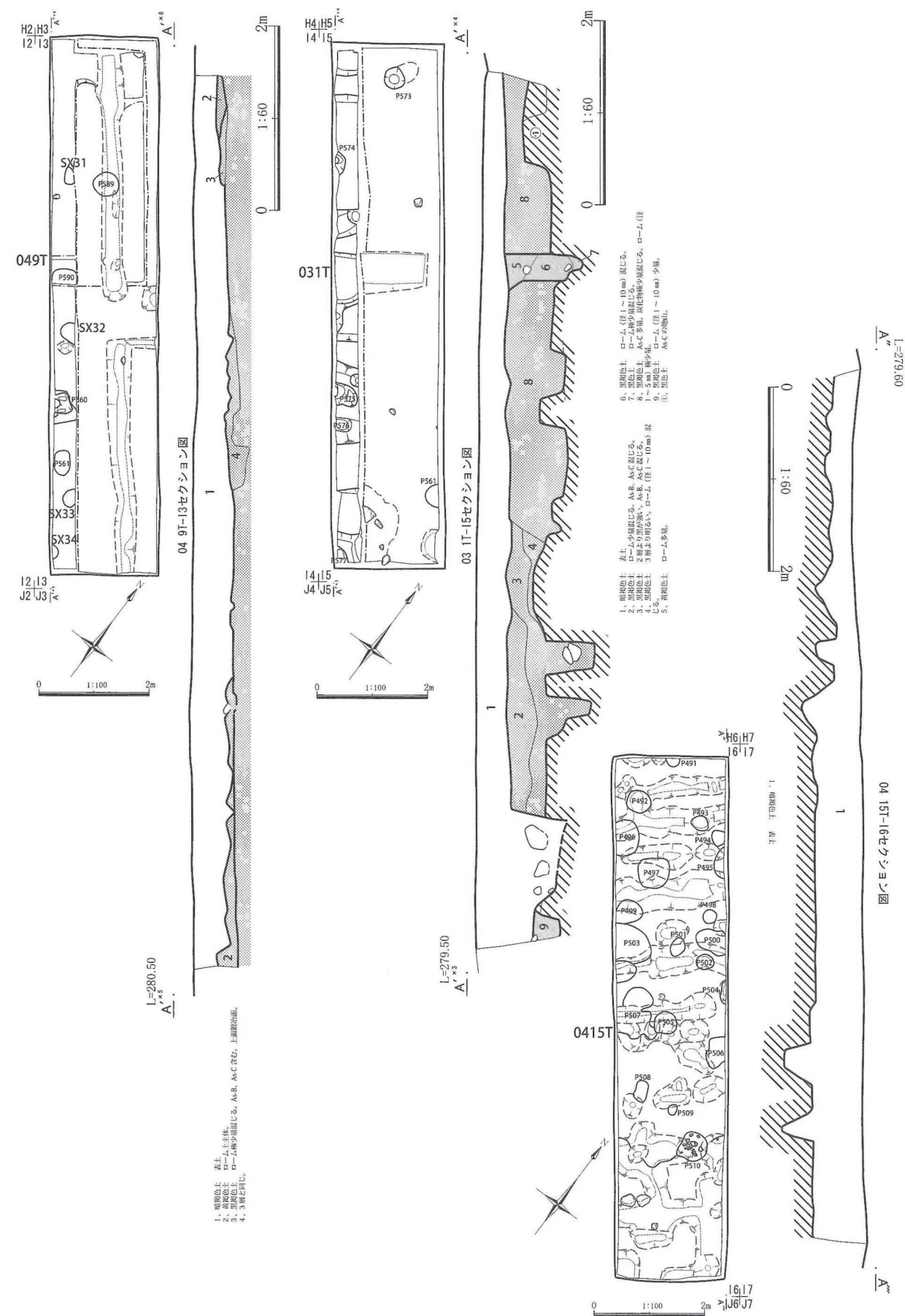


第 169 図 本丸地区 H7・H8 グリット 032T (平面図・セクション図)、SV7 (平面図・立面図)

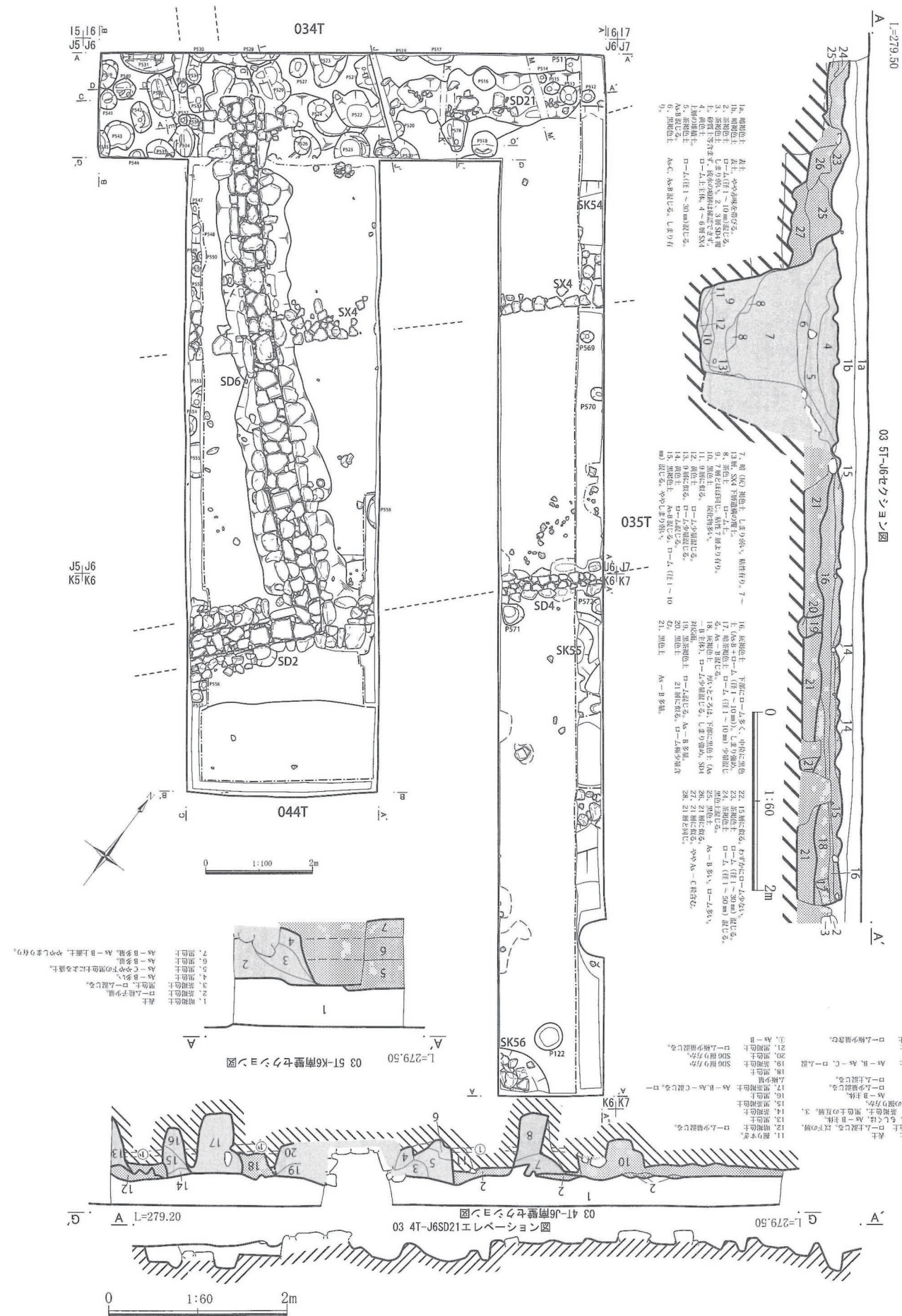
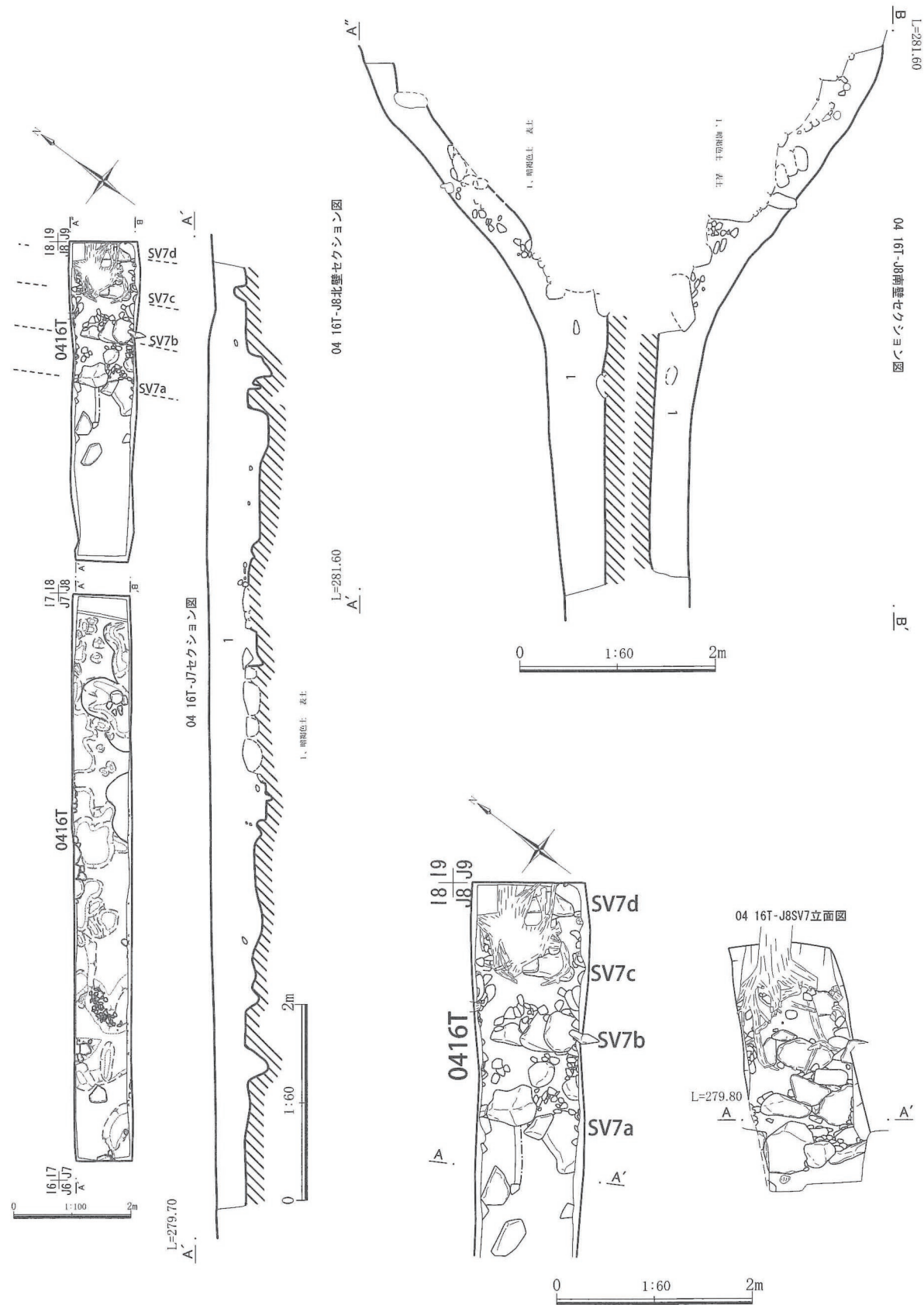


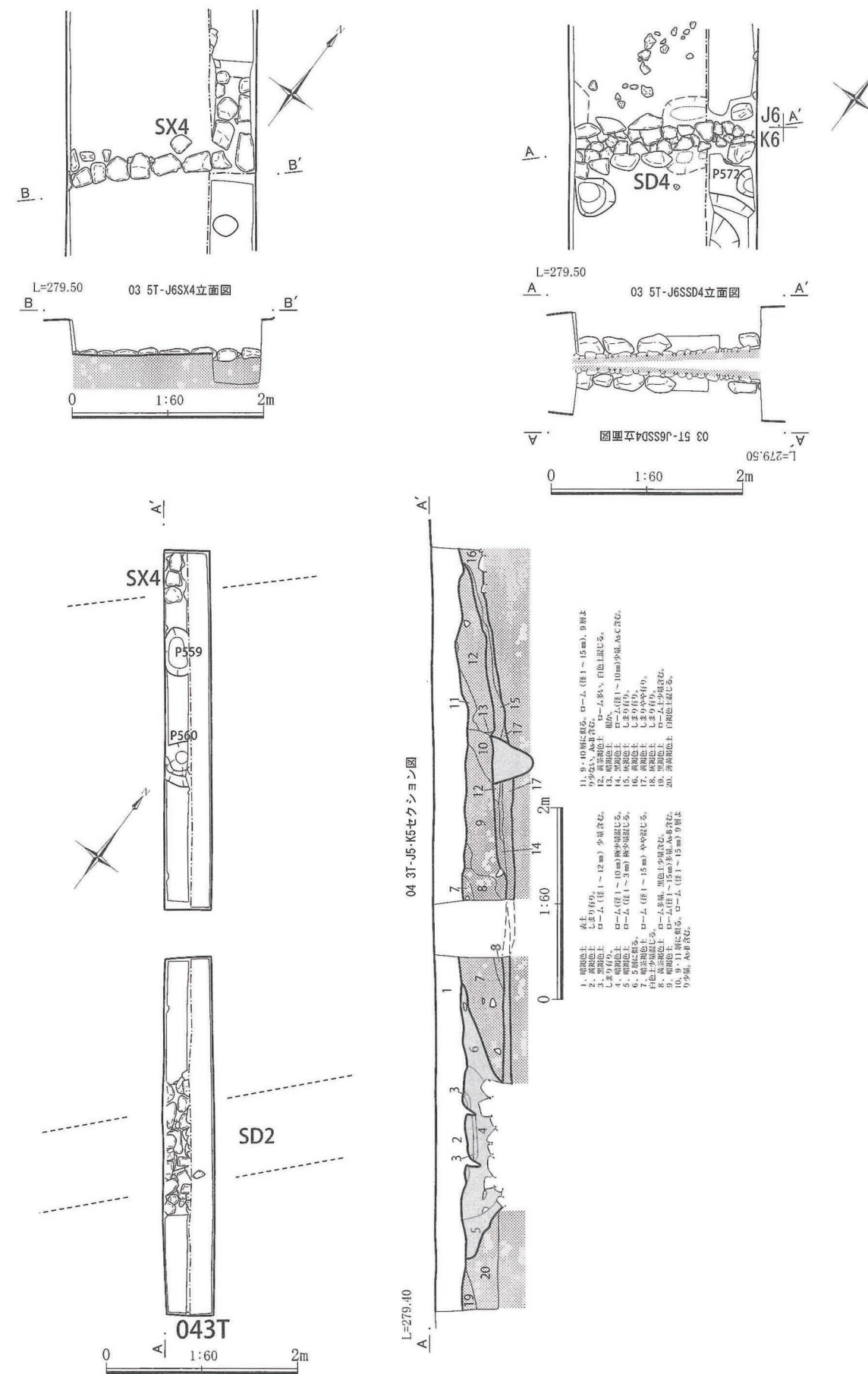
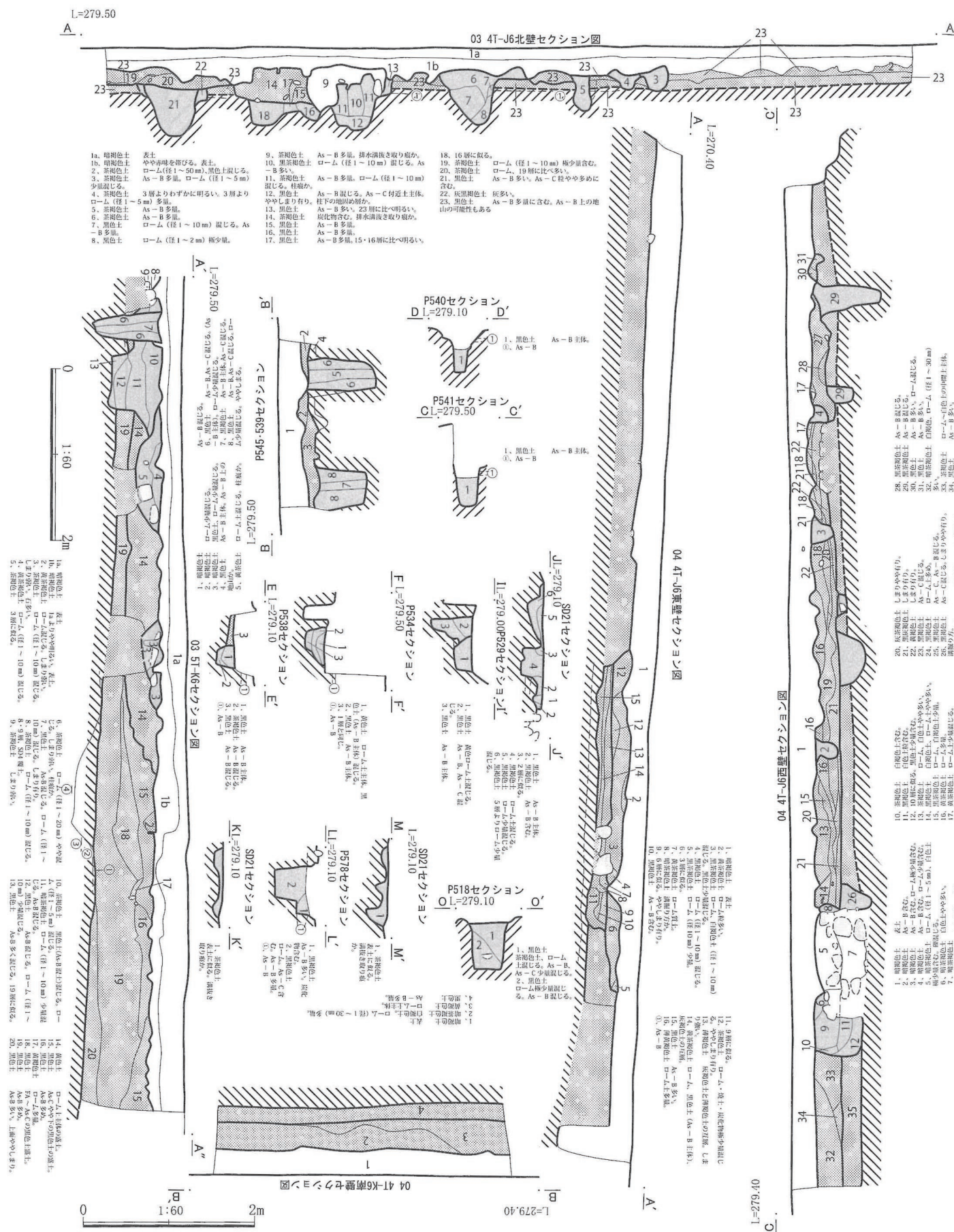


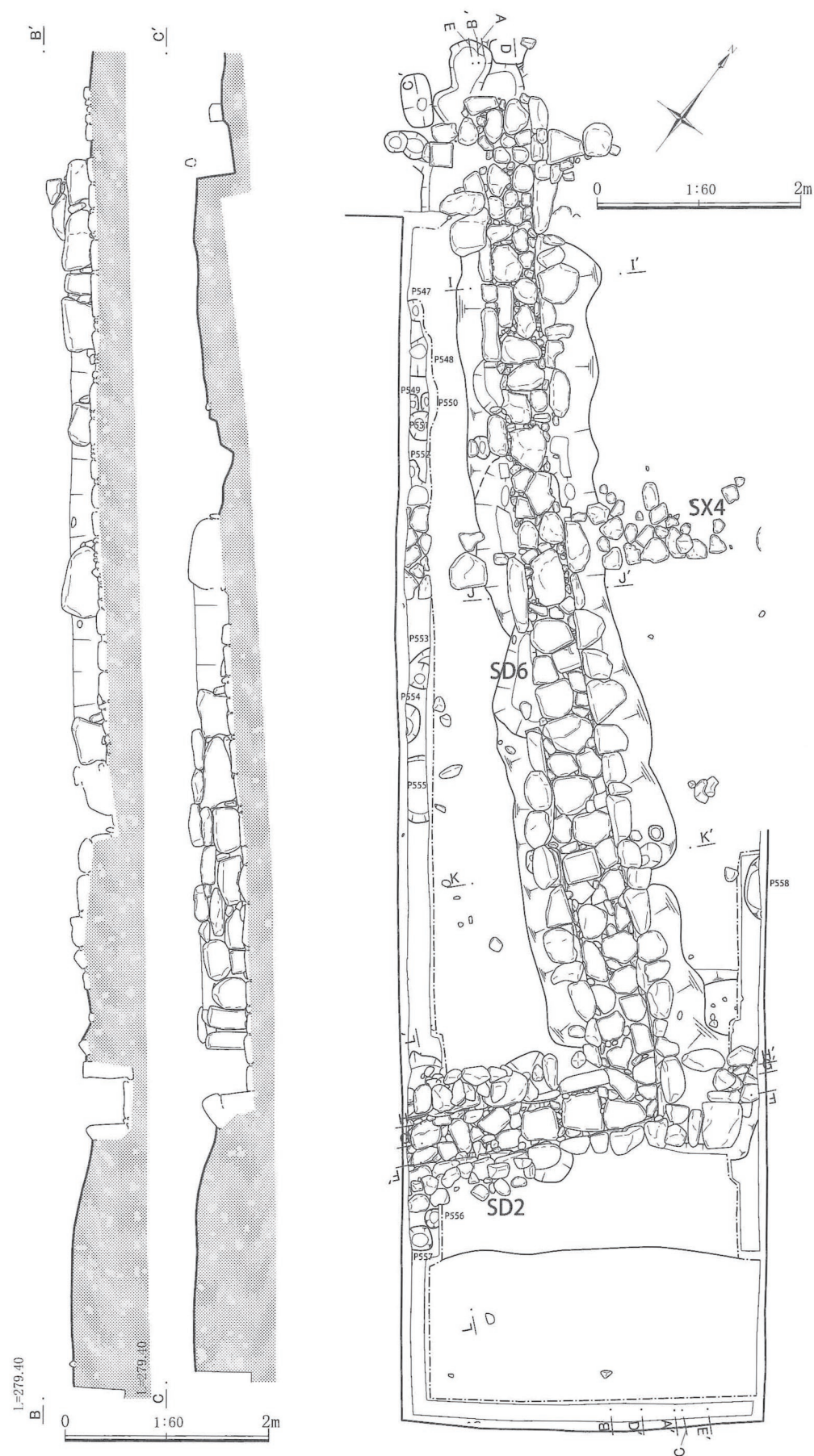
第172図 本丸地区 G3・H2・H3 グリット 049T・032T (平面図・セクション図)



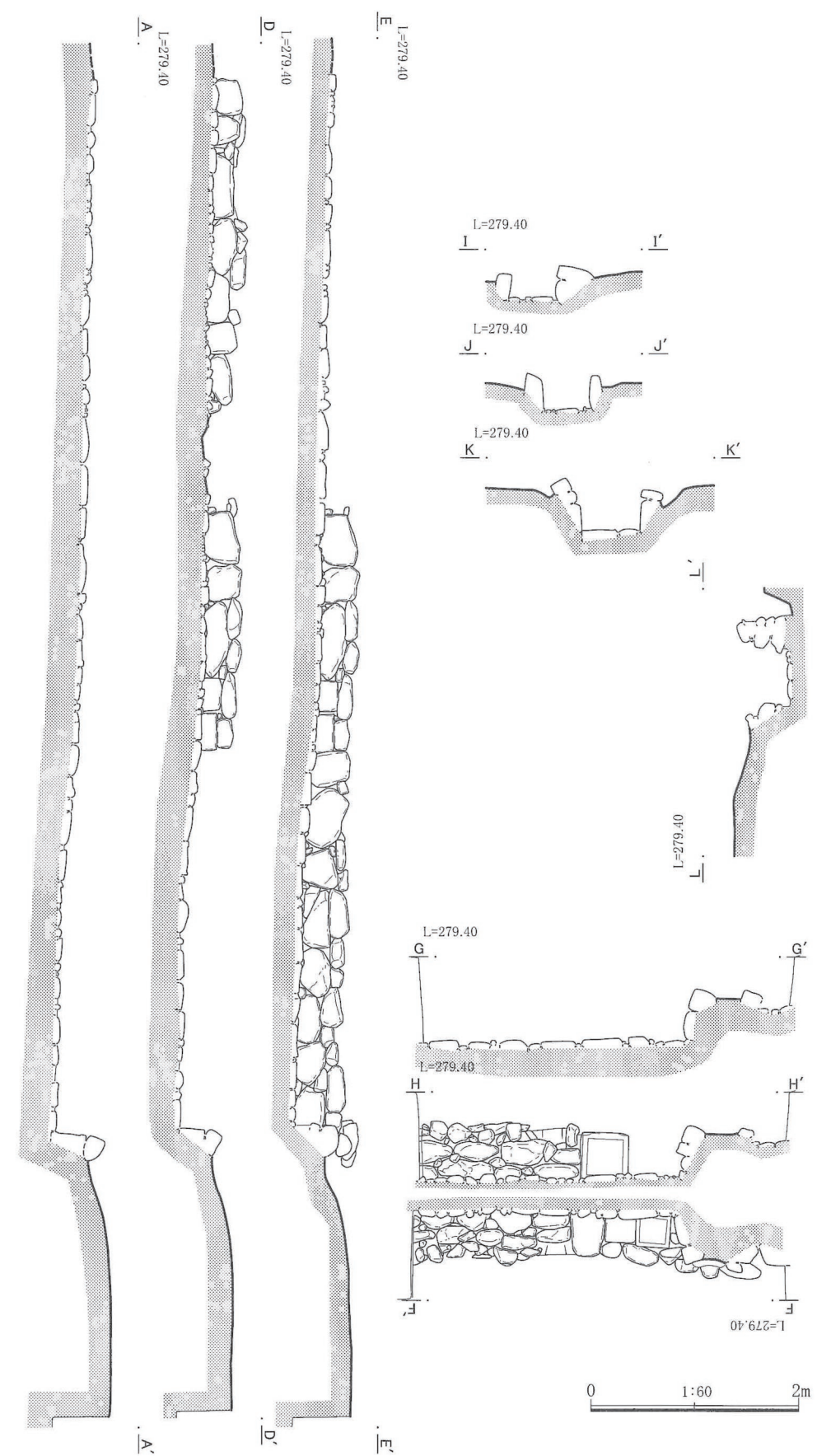
第173図 本丸地区 I3・I5・I6 グリット 049T・031T・0415T (平面図・セクション図)







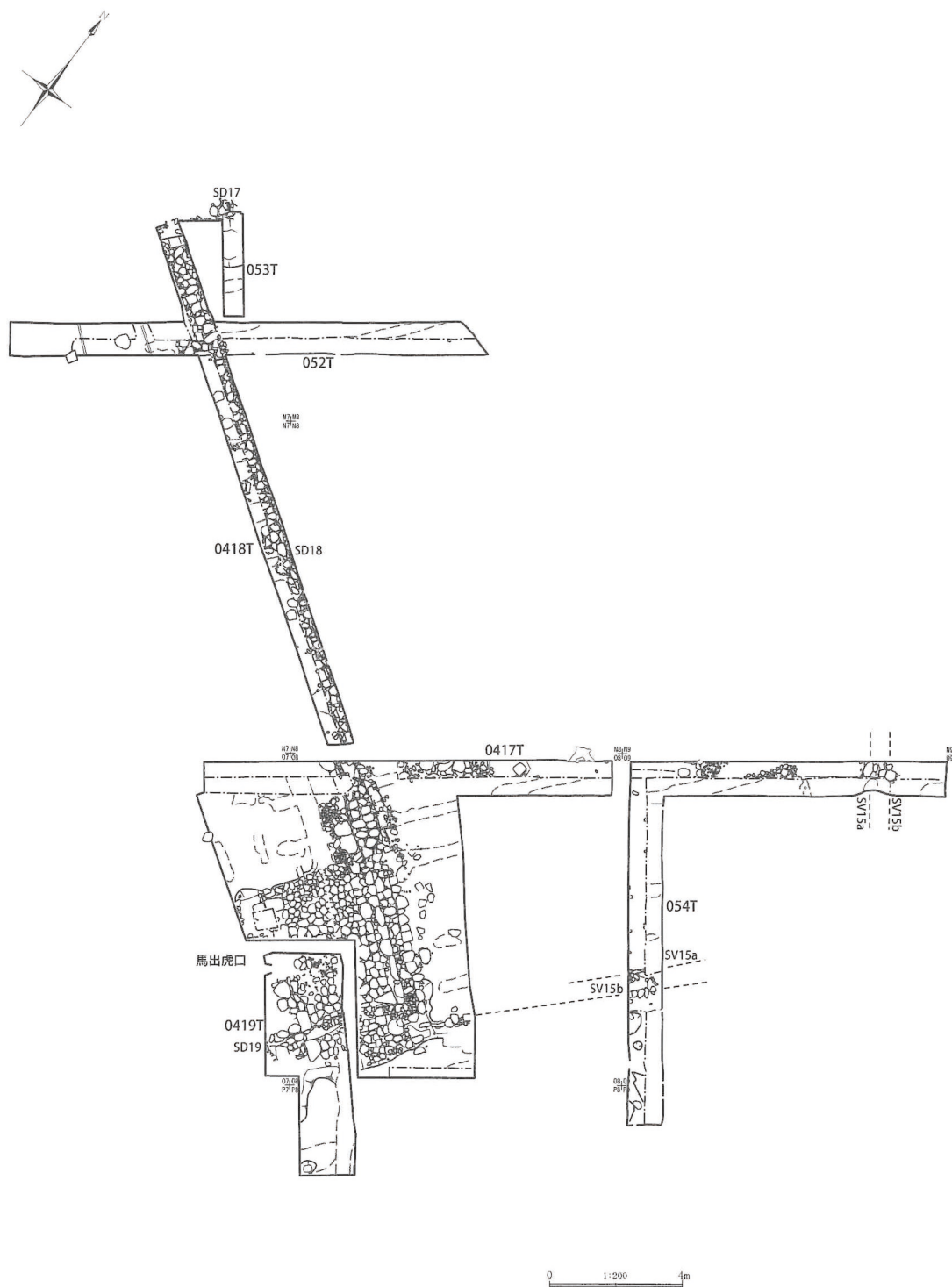
第 178 図 本丸地区 J6・K6 グリット 044TSD2・SD6 (平面図・立面図①)



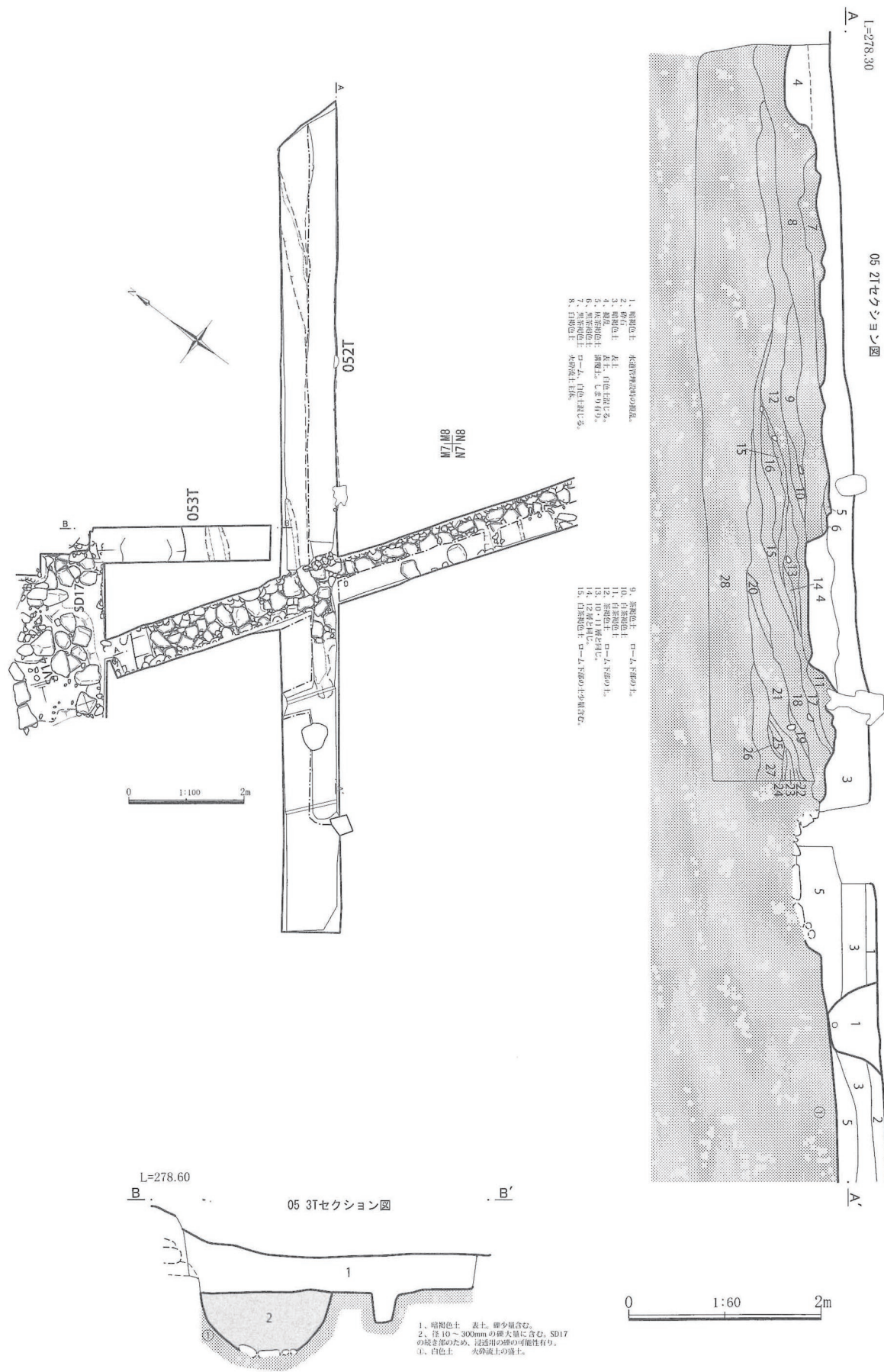
第 179 図 本丸地区 J6・K6 グリット 044TSD2・SD6 (立面図②・エレベーション図)



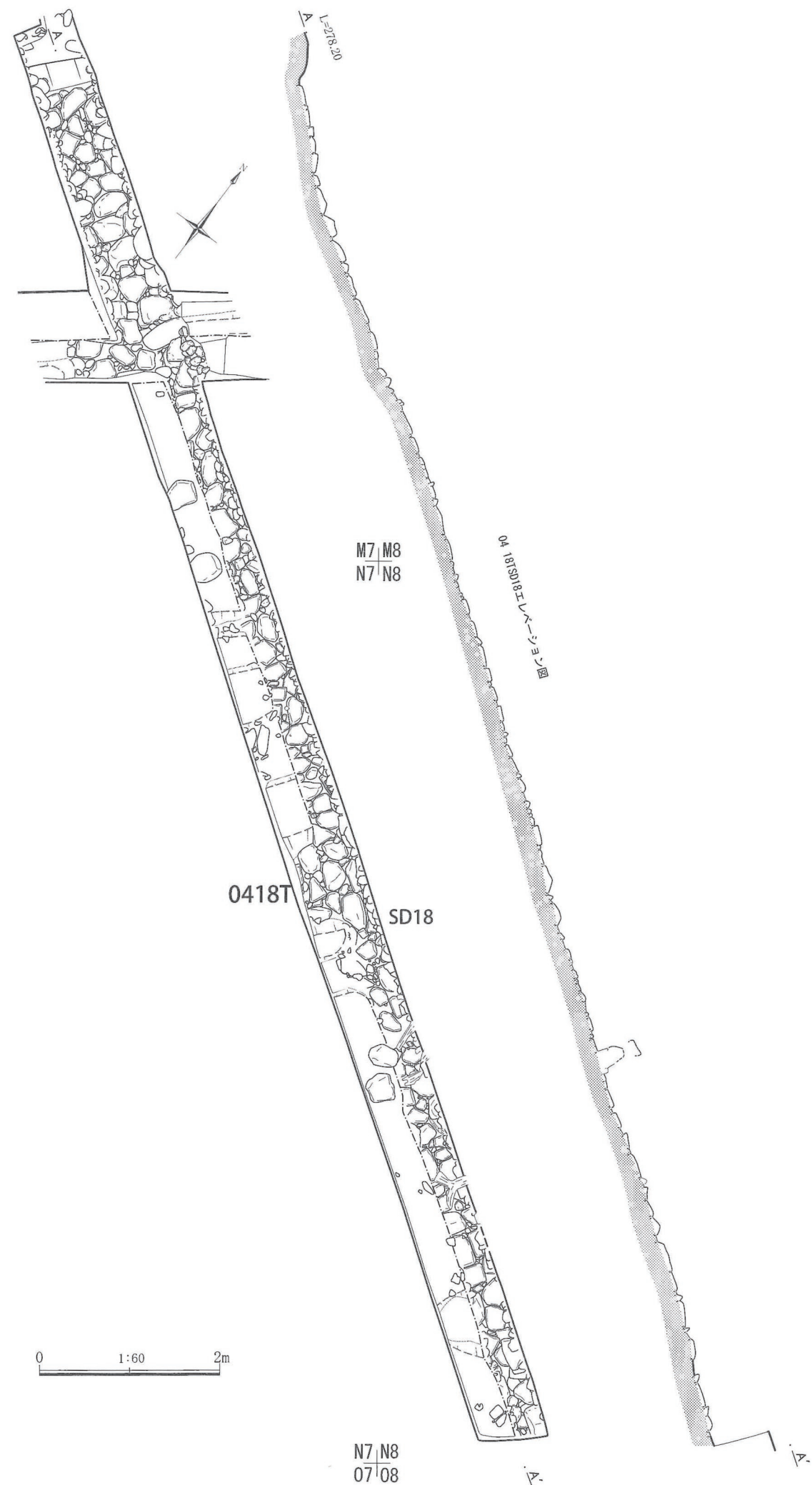
第 181 図 本丸地区 L6・L7・M6・M7 グリット本丸南虎口（平面図）



第 183 図 本丸地区 M7・M8・N7・N8・07～09 グリット本丸馬出部（平面図）



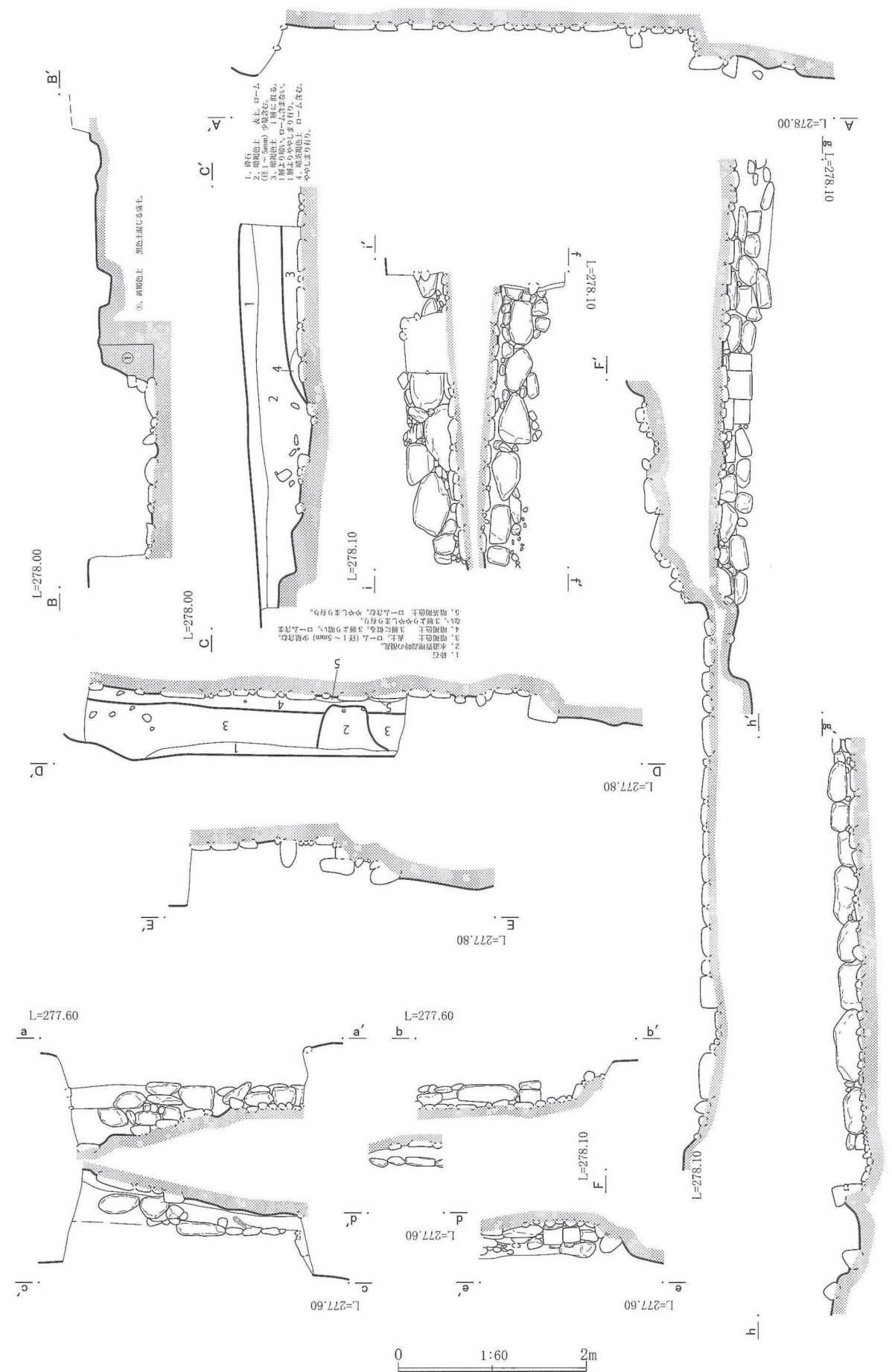
第 184 図 本丸地区 M7・M8 グリット 052T・053T (平面図・セクション図)



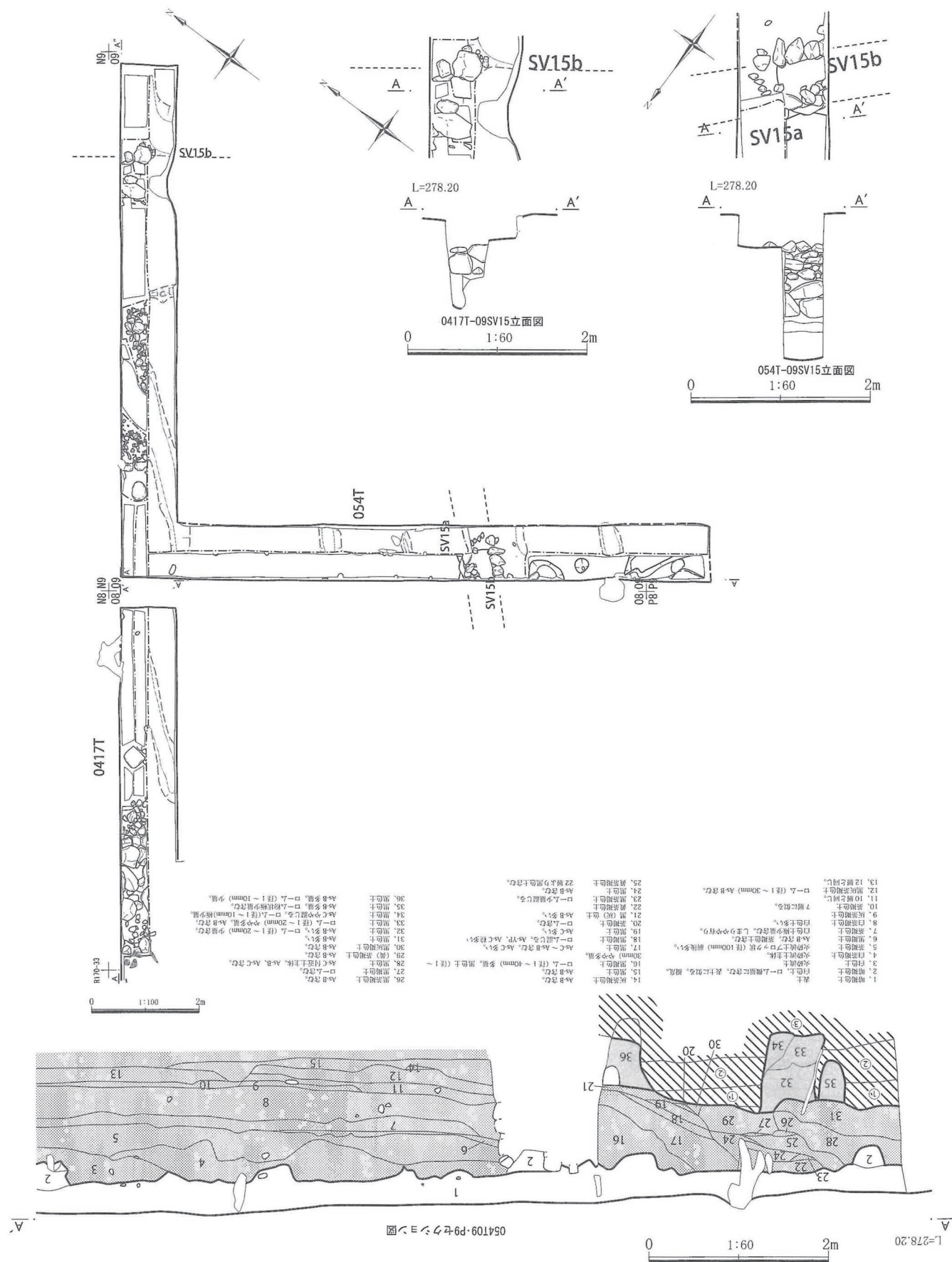
第 185 図 本丸地区 M7・N7・N8 グリット 0418TSD18 (平面図・エレベーション図)



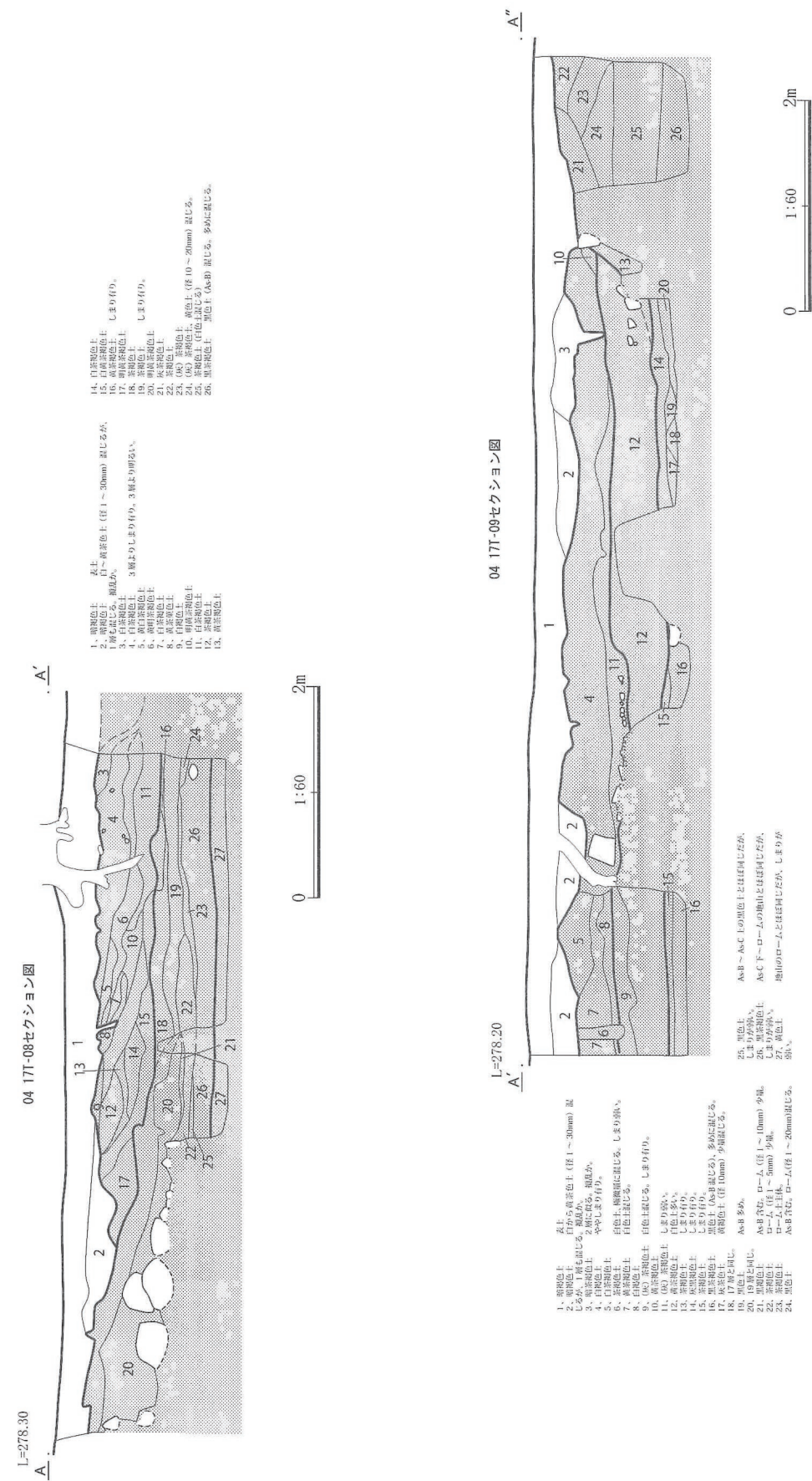
第 186 図 本丸地区 07・08・P8 グリット馬出虎口（平面図）



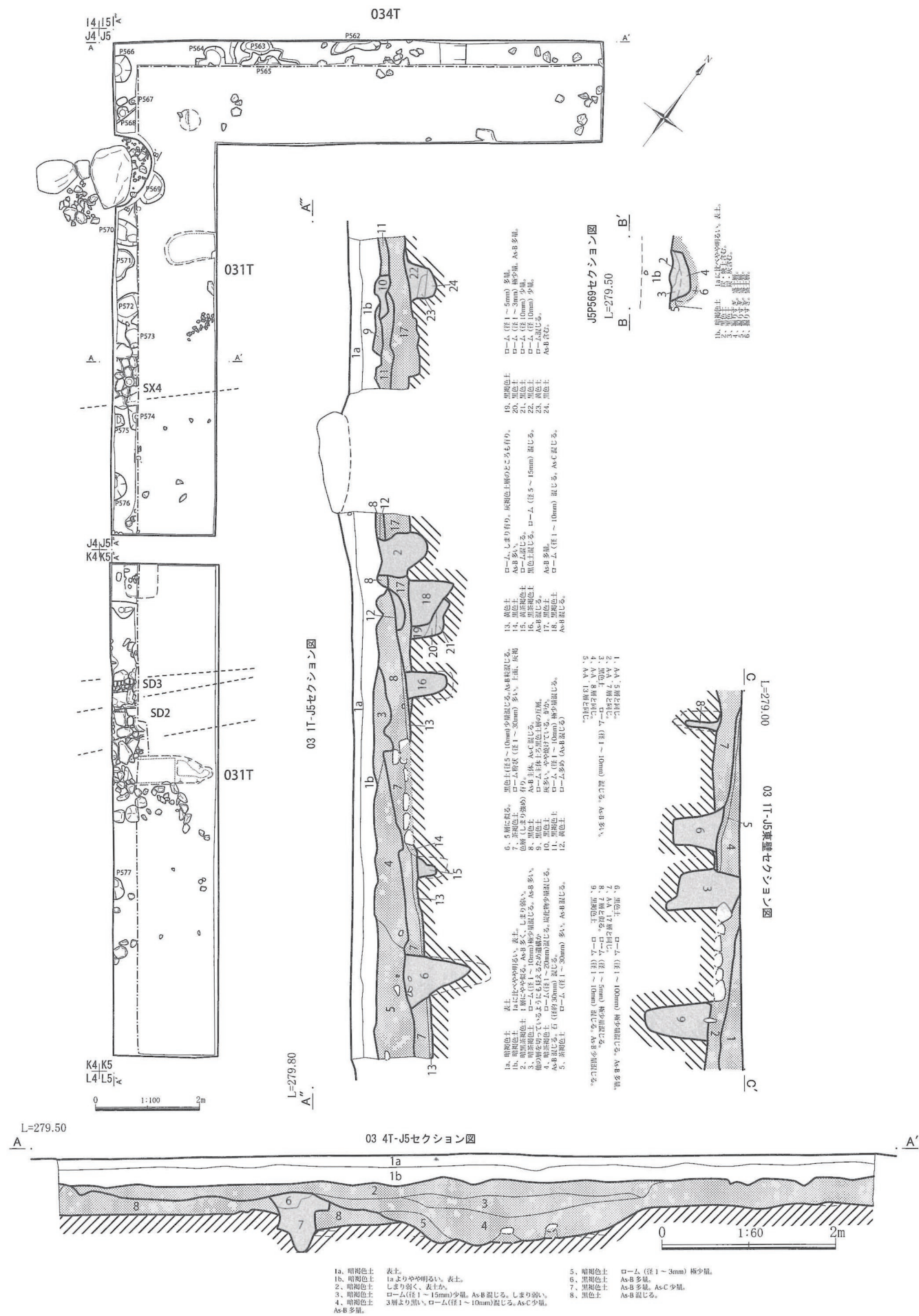
第 187 図 本丸地区 07・08・P8 グリット馬出虎口 (セクション図・立面図・エレベーション図)



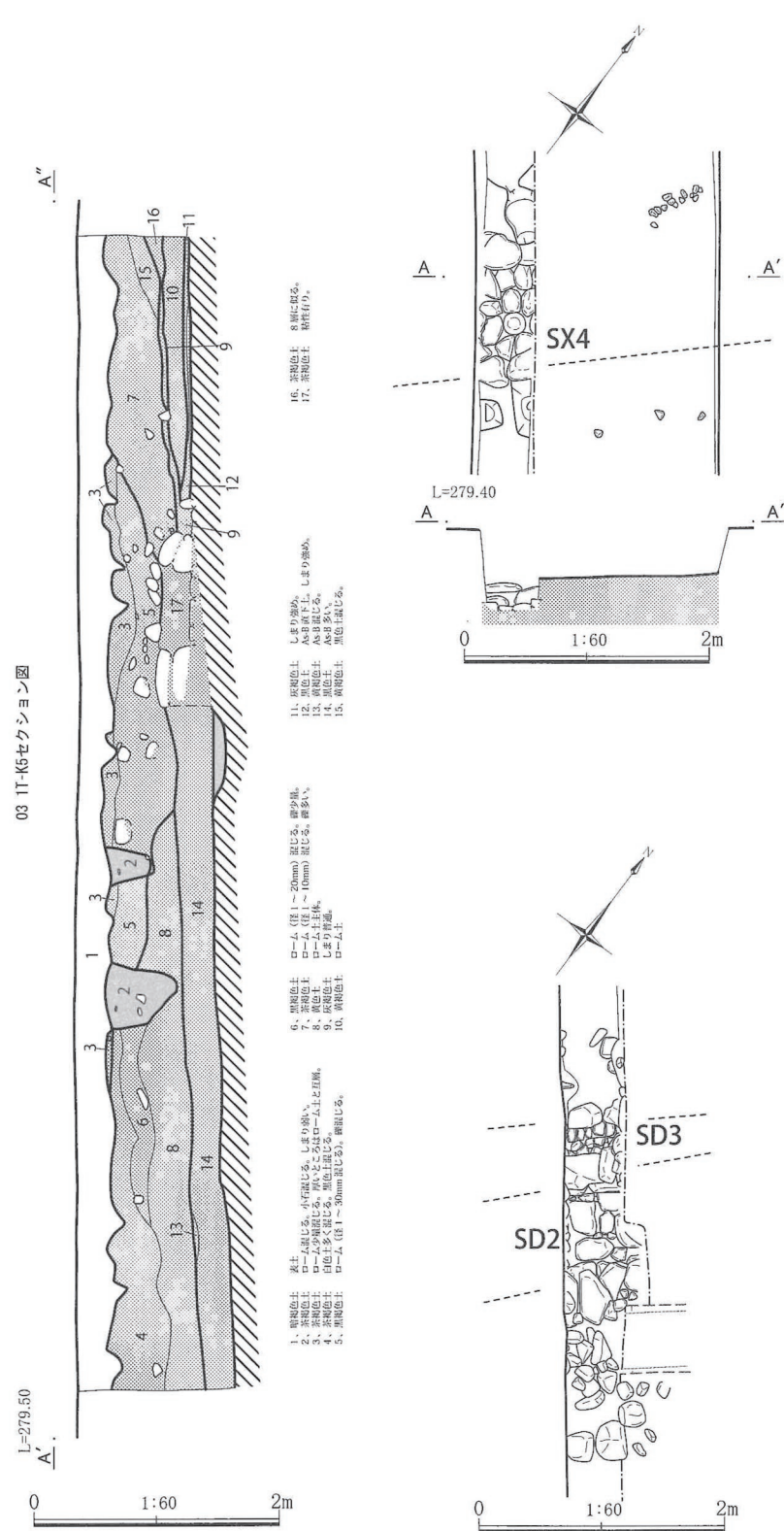
第 188 図 本丸地区 08・09 グリット 0417T・045T (平面図・セクション図①)、SV15 (平面図・立面図)



第 189 図 本丸地区 08・09 グリット 0417T (セクション図②)



第190図 本丸地区 J5・K5 グリット 031T・034T (平面図・セクション図①)

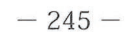


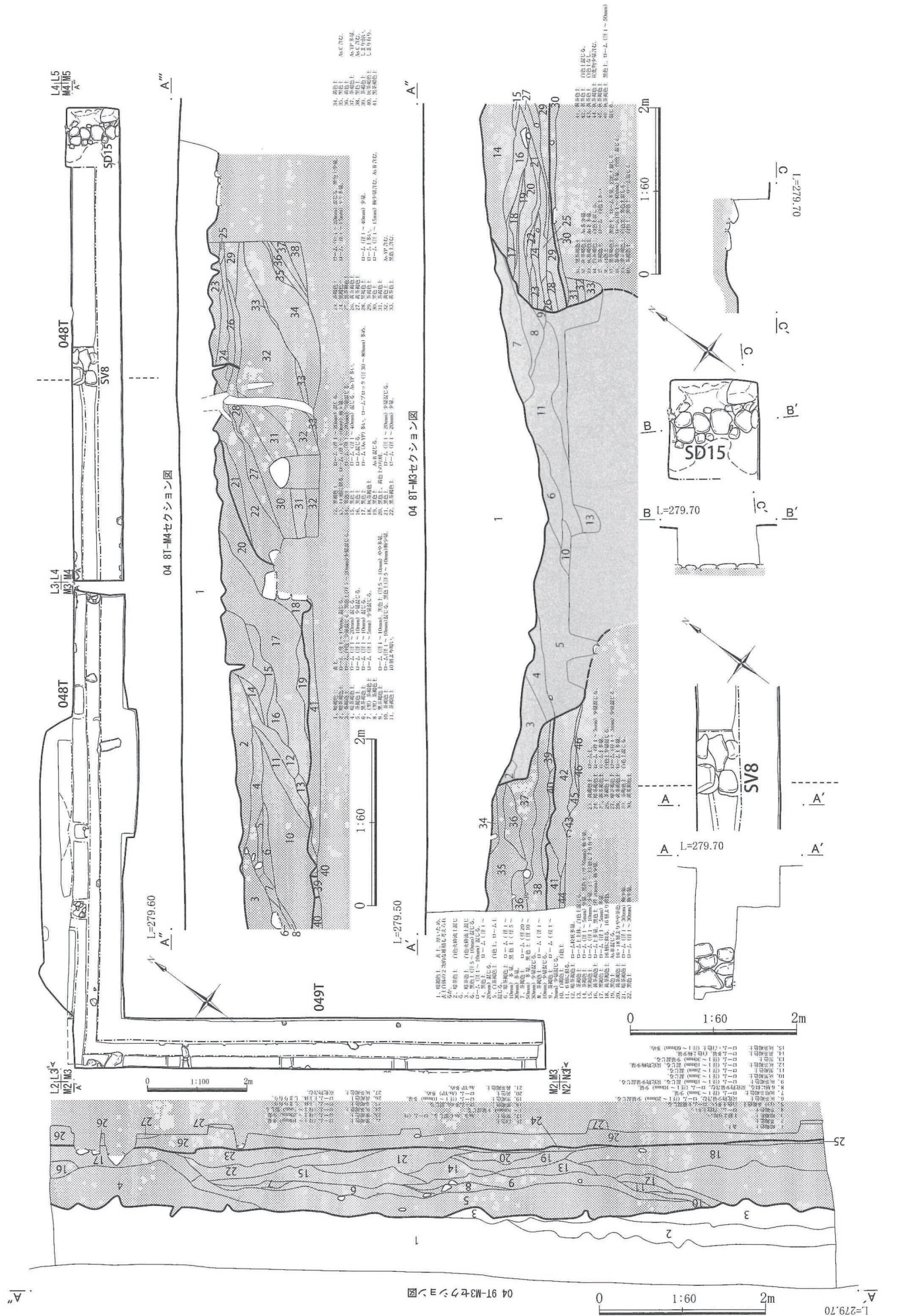
第191図 本丸地区 K5 グリット 031T (セクション図②)、SX4・SD2・SD3 (平面図・立面図)

— 244

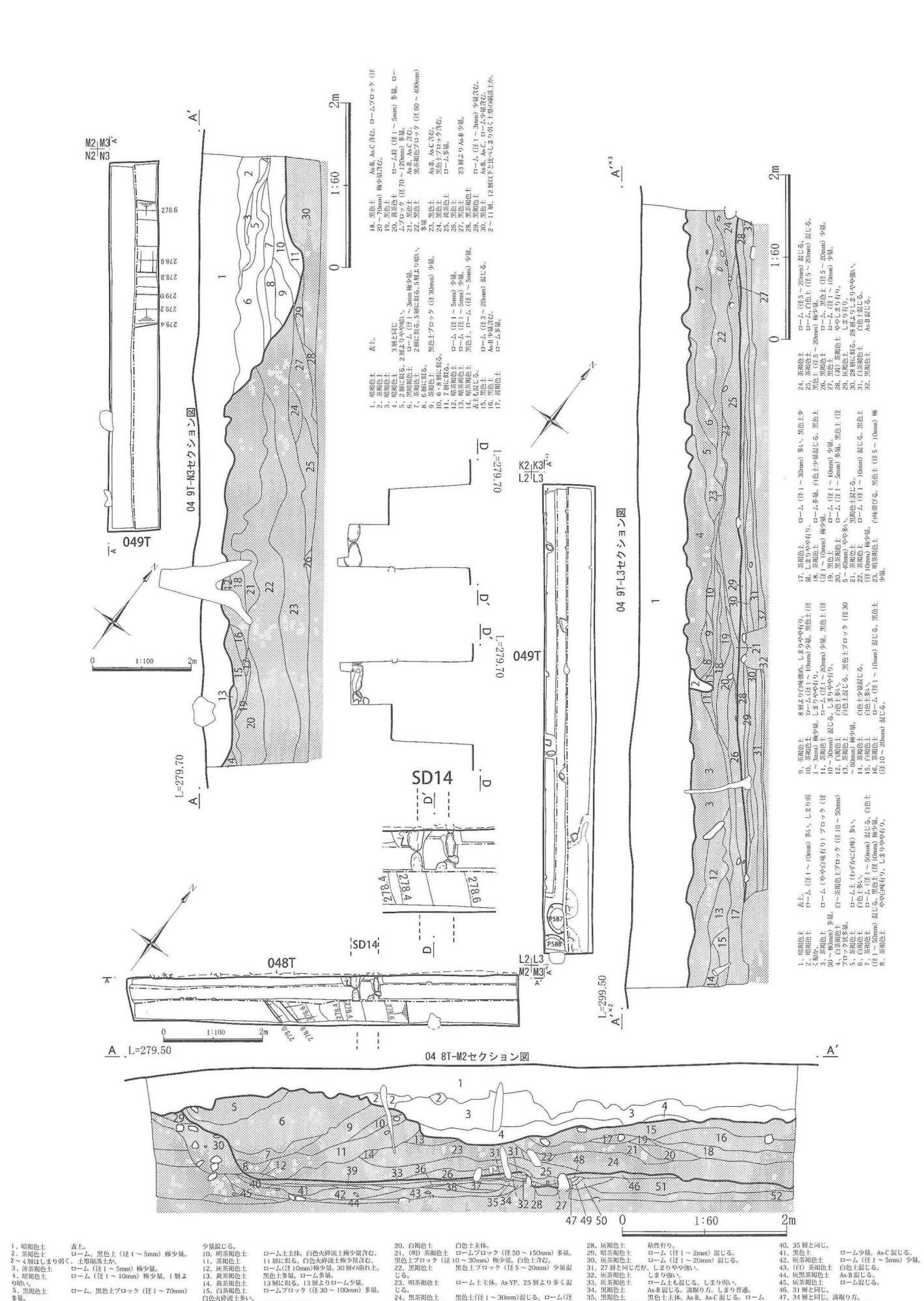


— 245 —





第194図 本丸地区 M3・M4 グリット 048T・049T (平面図・セクション図)、SD15・SV8 (平面図・立面図・エレベーション図)



第195図 本丸地区 L3・M2・N3 グリット 048T・049T (平面図・セクション図)、SD14 (平面図・立面図)